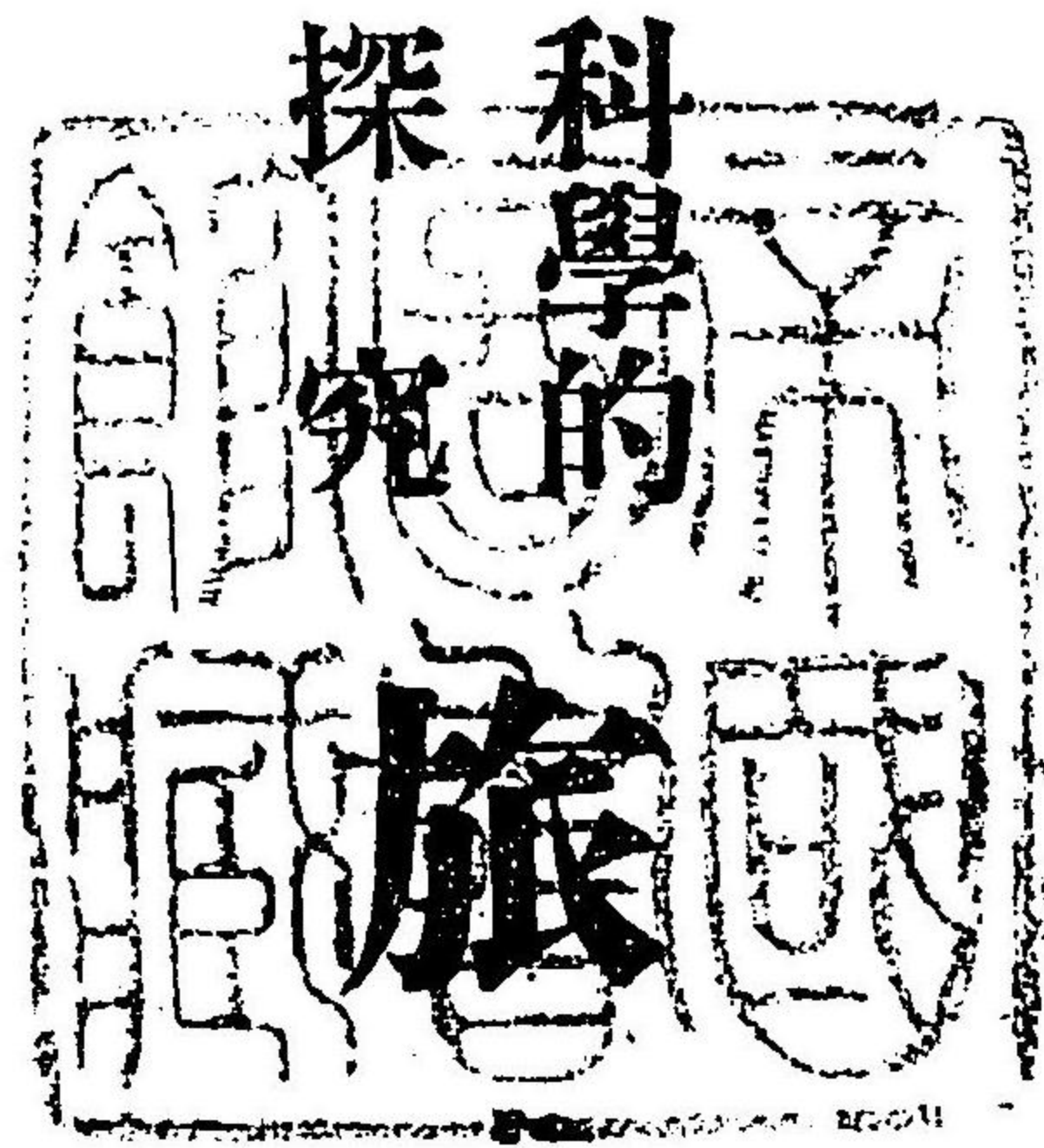


30-422



湖東神谷有終編

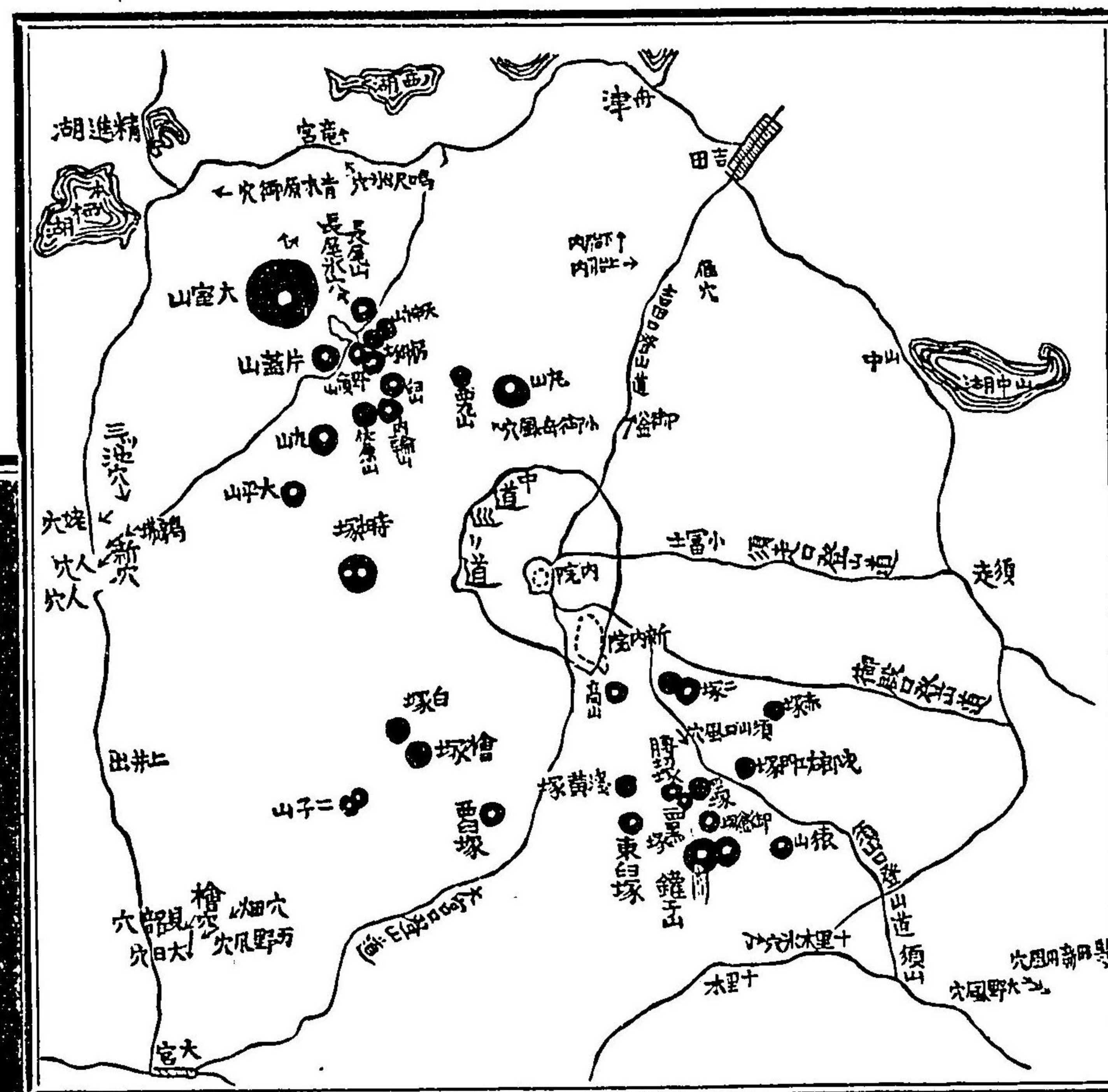
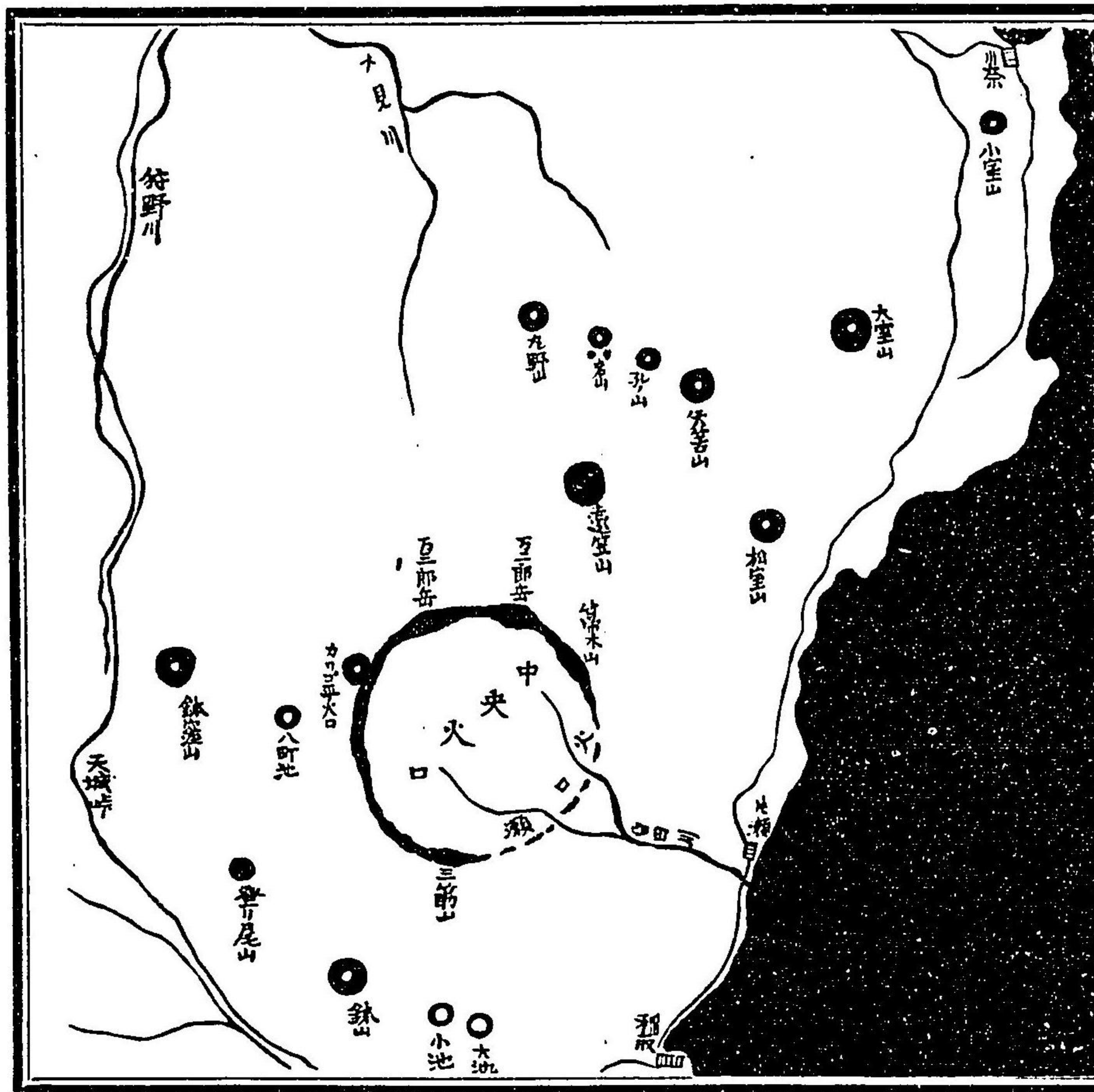
第一卷

行案內

明治
39 7 13
內交

積文堂書店發行

布分之山火側城天
(ル據ニ査調士學原石)



(縮尺三十萬分ノ一)

布分之道洞岩熔及山火側士富
(ル據ニ査調士學林平)

縮尺二十萬分ノ一

千里を一瞬の中に集め、万山を指顧の間に役し、雪を嚼み詩を吟するの快は、山に登りて始めて得らるべく、海頭に立ちて潮香に酔ひ、旭光を浴びて軟沙を踏み、風に嘯き懷を馳するの樂は海に遊びて始めて知るを得べし、然りと雖、山水の遊行、豈音に快樂のみにして止まんや、明の旺文、盛萬山を叙して曰く、直なるものは以て吾方となすべく、曲なるものは以て吾智となすべく、牙然たるものは以て吾達となすべく、窪然たる者は以て吾宏となすべく、巖にして穹なるものは以て我節となすべく、男にして崩なるものは以て吾奇となすべく、其摩蕩峻極の勢は以て吾氣を作すべく、其開闔變化の状は以て吾文を發すべく、其生育植養の功は以て吾仁を推すべく、其升降欬正の形は以て吾守を固うすべしと、夫れ山水の洪益此の如く、心胸を開

登して能く人を變じ、道機を觸發して能く人を化す、故に東山に登りて魯を小とせしもの、一度泰山に登れば天下を小とするに至る、古人曰く、山を見るは猶書を見るが如く、大小高下其人の識見に資ると、余の山水に對するや、其見固より小且下其るを免れずと雖、常に好で山に攀ぢ水に遊ぶの癖あり、故に苟し探究の資材たるべきものは、論説を寫し、談話を録し、新紙を缺し、雜誌を割し、今や其零紙断片、積で筐裡に充てり、故に之を整齊して、一は白己他日の遊に備へ、一は同好諸氏の資に供せんとするのみ。

對岳書樓にて

神谷湖東

丙午初夏

例言

一、從來有益なる旅行案内の出版せられたるもの夥からずと雖、多くは名勝舊址の叙事に止り、科學的に之を記載したるもの稀なり、學術勃興の今日稍々物足らぬ感なき能はず、本書は其欠陥を補ひ、旅行の快樂と共に、科學的興味を惹起せしめんが爲に編輯したるものなり。

一、本書は、目的已に斯くの如きを以て、所謂名勝舊址にあらざるも、斷層、褶曲、浸蝕、建設等の如き、顯著なる自然現象ありて科學的探究の標記たるべき地は之を記載し、且必用の場合には其學理を示し、併せて之に對する諸家の學說をも附記したり。

一、本書の分割は、縣別によらず又國別によらず、便宜一地方を一部となし、逐次刊行して各地に及ぼさんとするものなり。

一、旅行は、概れ目的地を撰定して出發するものなるが故に、本書には其目的地たるべき地點を題目となし、其沿道及附近の事柄をも記載したり、是學

竟旅行者の便を計りてなり。
一、本書は、旅行資料として集めたる手扣より拔萃せしものなれば、記事の出所は書籍・雜誌・新聞・報告等各種に渉り、一々書目を明にすること難しと雖、左の諸書には頁ふ所最多く、中には其字句を寫し採りたる所も少からざるが故に、茲に特記して著者の德に背かざらんことを期す。

震災豫防調査會報告
大日本地名辭書

地質學雜誌
日本山岳誌

地學雜誌
歴史地理

著 者 識

科學的 旅行案内第一卷目次

富士休火山

山體の構造

火山噴出の理 ●富士山は成層火山の好標品

寄生火山及爆裂火口

四頁

- 寄生火山を生ずる理 ●高山 ●淺黃塚 ●東白塚 ●腰切塚 ●西黒塚
- 御釜塚 ●東黒塚 ●鐵子山 ●嶺山 ●ニツ塚 ●赤塚山 ●治那右衛門塚 ●平塚 ●太平山 ●丸山 ●佐原山 ●内輪山 ●白山 ●西丸山 ●丸山 ●弓射塚 ●野頭山 ●天神山 ●長尾山 ●大室山 ●四白塚 ●白塚 ●檜塚 ●二子山 ●増塚

熔岩洞道

九頁

- 熔岩洞道の成因 ●駒田新田風穴 ●大野風穴 ●十里木氷穴 ●萬野風穴 ●人穴 ●姥穴 ●三ツ池穴 ●新穴 ●鴉場 ●青木原御穴 ●龍宮 ●鳴澤氷穴

長尾水穴 ● 須山口風穴

裾野及裾野湖 一二頁

登山道 一四頁

大宮口 一七頁

鈴川驛 ● 吉原 ● 福泉寺 ● 入山瀨 ● 大宮 ● 萬野の熔岩洞道 ● 村山 ● 山岳の凝結作用 ● 特色

吉田口 二二頁

桂川の水蝕 ● 大月の熔岩流 ● 谷村 ● 北口浅間社 ● 鈴原の熔岩洞道と熔岩堤 ● 小室神社の古像 ● 小御嶽 ● 火御子 ● 特色

御殿口 二八頁

御殿場 ● ニッ塚 ● 寶永爆裂火口 ● 特色

須山口 三〇頁

佐野瀧園及佐野原神社 ● 側火山及須山口風穴 ● 特色

須走口 三一頁

須走 ● 特色

噴火口 三二頁

火口壁 ● 火口内 ● 山上の水 ● 噴汽孔 ● 火山彈

寶永爆裂火口 三八頁

裾野巡覽 四〇頁

萬野風穴 ● 本門寺と大石寺 ● 井出館の舊址 ● 白絲瀧 ● 人穴 ● 人穴附近の熔岩洞道 ● 鳴澤間道の側火山 ● 本栖湖 ● 精進湖 ● 青木原の熔岩洞道 ● 四湖 ● 河口湖 ● 妙法寺記 ● 吉田 ● 山中湖 ● 龍坂峠 ● 須走 ● 御殿場

愛鷹火山 一五頁

熊ヶ谷噴火口 ● 大澤爆裂火口 ● 登山

箱根熄火山

沿道……………五三頁

箱根山の構造……………五九頁

山中巡覽……………六三頁

湯本 ●温泉の種類 ●塔の澤 ●宮の下 ●堂ヶ島 ●底倉 ●蛇骨原の蛇骨石
●木賀 ●仙石上下の湯 ●早雲地獄 ●大湧谷 ●噴汽孔温泉の新舊 ●姥子
●小浜谷 ●湯の花澤 ●芦の湯 ●上双子山 ●下双子山 ●精進ヶ池 ●響の池
●芦湖 ●元箱根 ●箱根権現 ●箱根驛 ●箱根關の址 ●箱根舊道 ●日金峠

熱海間歌泉

沿道……………八〇頁

石橋山 ●根府川石 ●江の浦の遺跡 ●岩村と眞鶴岬 ●土肥 ●伊豆山温泉 ●伊豆山神社

熱海……………八五頁

熱海火山の構造 ●間歇温泉 ●フンケン氏の説 ●本多寺田兩氏の説 ●温泉寺

●公園 ●初島 ●錦浦

伊豆半島

天城熄火山……………九五頁

東海岸……………九八頁

網代爆裂火口 ●伊東温泉及城址 ●小室山と大室山 ●日蓮配流の遺跡 ●天城の火
口瀬 ●河津川筋 ●白浪 ●下田 ●長磯と彌陀窟 ●石廊岬の集塊岩

猫越火山と達摩火山……………一〇四頁

猫越火山群 ●達摩熄火山

西海岸……………一〇五頁

田子の浦 ●烏帽子山と波勝岬 ●國柱神社の石棒 ●堂ヶ島の洞窟 ●土肥 ●戸田

豆北の史跡……………一一〇頁

- 三島町及三島神社 ● 國府及國分寺の址 ● 柏谷の横穴 ● 文覺上人配流の遺跡と國清寺
- 圓成就院と北條時政の墓 ● 韭山城址と反射爐の遺跡 ● 蛭島の址 ● 棚越御所の址
- 北條義時の邸址と偽義時の墓 ● 宗光寺の古墳と田京の古瓦 ● 修善寺温泉 ● 修善寺
- 源賴家の墓 ● 源頼朝の墓 ● 正覺院 ● 修善寺城址 ● 旭瀑 ● 四温泉等 ● 湯ヶ島温泉と附近の廢坑 ● 鉢窪山と淨蓮瀑

補遺

富士登山の新道

一二五頁

目次終

科學的旅行案内

富士休火山

雄然として東海の表に屹立し、地を抜くこと一萬數千尺、四時皚々たる白雪を冠し、秀麗奇偉の氣、毅然として神洲を歴するものは、富士の靈峰なり。若し夫れ一度之れが絶巔を究めんか、千古息まざるの天風、飄々として衣袂を吹き、萬里涯なきの雲海、團々として魔界を封じ、人をして羽化登仙の思あらしむ。余は之より其神秘を發き、天技の妙を究めん。

山体の構造

富士の高峯たる、北樺太の山系と、南、崑崙の山系と相會する所、地勢錯雜

を來し、地盤脆弱を極め、所謂富士火山帯なる裂罅線を生せしを以て、地下の強熱は、此弱點を得て大噴出を起し、其結果は大堆積を來し、層々高さを加へて、今や斯く雲表に聳ゆるに至れるなり、此裂罅線上は、北、日本海岸の焼山より、南、遙に渺茫たる太平洋に亘りて、マリアナ群島に及び、富士山を盟主として、愛鷹の如き、天城の如き、皆姉妹的關係を有し、地を變へ、時を異にして噴出せしを以て、高山峻岳峨々として相連り、南北兩日本の自然的區劃をなせり、

火山噴出の理 地球の内部は甚しき酷熱なること、温泉の湧出等より見るも明なり、而して其熱は漸次冷却しつゝあるが故に、之に伴ひて地球は容積を縮少し、内部は益々甚しき壓力を受くるに至る、是原因の一。雨水は一部分地上を流れ去れども、一部は地中に滲入して地下水となる、而して地下水の深く地中に滲入せしものは、内部の熱の爲に甚しき高熱に達すれども、液体となるには数十倍に容積を膨脹せざる可らざるを以

て上部の壓力の爲に液化すること能はず、液体の僅流動すれども、斯る高熱なる水が、地皮の弱點を會し、地表近く達して、其膨脹力が上部の壓力に打勝つに至るときは、俄然流化膨脹し、猛烈する勢を以て噴出し、下部の壓力も亦之が爲に減するが故に、熔岩中に含める水分も、又流化して熔岩を壓し上げ來るものなり、是原因の二。

斯く火山は外部壓力の爲に、内部より噴出せんとする傾あること、恰も大餅を壓く握れば、餡が洩れ出でんとするが如く、斯る際に地下水が、深く滲入して熱を受け、地皮の弱點に會して爆發し、導をなすが故に、地下水の分も亦流化し、烈しき勢にて熔岩を壓し上げ來ること、恰もラムネ壺の栓を抜きたるとき、内部の液體溢出するに同じ。

富士山は成層火山の好標品 火山の構造に二種あり、一は一時に熔岩のみを噴出堆積したるものにして、之を塊狀火山といひ、一は熔岩・火山砂・火山灰等を交互に堆積したるものにして、之を成層火山といふ、成層火山は種々の物質層々相重りて成り、山體も偉大なるもの多し、富士山は即ち

此種的好模範なり。

寄生火山及爆裂火口

火山は概ね頂上に噴火口を有すれども、必しも山頂のみより噴出するものにあらず、時に山側の弱點を求め、此より熔岩、瓦斯等を噴出して、附屬的山岳を造ることあり、之を寄生火山、又側火山といひ、富士山の中腹には、實に三十九個の多數なる寄生火山を存す。

寄生火山を生ずる理、火山が漸次形體を増大するとき、噴火の洞管は、益々延長し、且噴出物の落下、或は火口壁の崩壞等によりて、其口を狭めらるゝが故に、地中より噴出するに非常に強き力を要す、此に於て他に弱點ある時は、別に新火口を開きて側火山を生ずるに至る、殊に火山は、噴出の度毎に山體を振動し、爲に多數の裂罅線あるが故に、此等の裂罅線に沿ひて側火山を生ずるを以て、其排列は、頂上の噴火口と同心圓を畫きて存在

するが、或は輻射線上にあるが如し、其状態は富士山にて明に認め得べし。斯く多數の寄生火山が、從來世上に著しく知られざるは、此等の大部が、皆深林翁鬱の中に潜在すると、一方には富士の高嶺の巍然壯大なるに對し、人の注意を促さざりしに依るなり、其配置は甚だ複雑を極むと雖、東南愛鷹山との間、及び西北本栖精進、西湖等との間に多く群集し、其他西南に其兩群を連ねて列狀をなす一群あり、今平林氏の調査に従ひ左に之を略記せん。

● 東南方に群集するもの

高山 大宮口登道一合目の東方にある小丘にして、頂上に火口を有す。

淺黄塚 前者の南方に在る小丘なり。

東白塚 圓錐形の山にして、山頂に火口あり、巨大なる樹木坑内に繁

腰切塚

西黒塚

御釜塚

東黒塚

鐘子山

猿山

二ツ塚

茂し篠竹殊に多し、

深林中に潜在する小丘にして頂上に凹所あり、

傾斜緩なる一小丘にして、圓形の火口を有す、

山上甚だ平坦中央に淺き火口址あり、

西隣の鐘子山を合せ見る時は、其間恰も馬鞍の如し、山頂に

深さ六七十尺の火口あり、楕圓形をなす、

側火山中大なるものにして、頂上に深さ百五十尺許の火口

を有し、南方欠損して此處より熔岩を流出せり、此熔流の火

口附近に一箇の熔岩洞道あり、俗に雷穴と稱するものなり、

須山登山道の左側にあり、山上に完美なる圓形の火口を存

し、坑底に雜草を生ずれども、雨後には瀦水をなすといふ、

二ツ塚 (登山道御殿口の章を見よ)

赤塚 二ツ塚の下方にある一小丘なり、
治郎右衛門塚 (登山道須山口の章を見よ)
平塚 高さ四百五十尺許、須山登山道の左側にあり、山上凹處無き
も平坦なるより此名あり、

● 西北方に群集するもの

太平山 (裾野巡覽の章を見よ)

丸山 (全)

佐原山 (全)

内輪山 (全)

白山 (全)

西丸山 深林中にあり、山上火口址と認むべきものなし、

丸山 高さ六百尺許なる圓錐狀の山にして、全山綠草多く、落葉松

所々に點在し、山上に火口を有す。

- 弓射塚 (裾野巡覽の章を見よ)
- 野頭山 (全)
- 天神山 (全)
- 長尾山 (全)
- 片蓋山 (全)
- 大室山 (全)

●以上の二群を連ねて西南に散在するもの

西臼塚 大宮登道の左側なる森林中に隠れたる小塚なり、頂上に小火口を有す。

白塚及檜塚 前者の西北に相並びて瘤起す、何れも火口址を存せず、二子山 大宮の東北に當り、二の小丘並立せり、頂上に小火口を有す。

時塚 西麓の森林中にありて高さ六百尺許、火口は山上にありて西に向ひ馬蹄狀をなせり、坑内羊齒類多し、底は少許の瀦水をなす、又此山の西方に一小火口址あり、里人小時と稱せり。

熔岩洞道

富士山は其山腹に、子たり孫たる幾多の寄生火山を有すること、前に述べしと雖、尙山麓には、人穴の如き、風穴の如き、數多の洞穴を有す、之を熔岩洞道といふ、今此等洞穴の主なるものを列舉せん。

熔岩洞道の成因 火山より熔岩の流出せし際は、甚しき高熱なる液体なれども、其冷却するや、表面は先づ固体となるが故に、此外皮の爲に、内部なる熱は却て放散を妨げられ、久しき年月を経るも、尙液体の狀をなせるものなり、故に其状態は、恰も飴を包める蠶の如し、之を熔岩蠶といふ、若し夫れ此蠶の下部破綻することあらんか、内部に包まれたる熔岩の液は、流

出し去り、外皮即ち固体の部分のみ依然として残存し、茲に長大なる洞穴を生ずるなり、是即ち熔岩洞道とす、

富士山麓の洞穴は、概ね斯の如くして成りしものにして、此種の洞穴中には、熔岩流出の後、尙残存附著せるもの、上部より滴下せんとし、垂懸せし儘冷却凝固して、氷柱状をなすことあり、之を熔岩鍾乳といふ、富士山に於ける熔岩洞道中には、熔岩鍾乳の存在するもの亦少からず。

駒田新田風穴 駒田新田村南端にあり、頗る完全せる者の一にして、殆ど彎曲無く、熔岩鍾乳多く、長さ千四五百尺にして、夫より漸く狭窄となれり、

大野風穴 須山より駒田新田に至る路傍にあり、今は三ヶあれども、昔は連続せしものならん、一は路の北傍にありて、長さ三十尺許、南傍にあるものは五六十尺許にして、進む能はず、尙東方に一箇あるも、陥落して凹所となれり、

十里木氷穴 十里木村の北方にあり、長さ五六十尺許にして、熔岩鍾乳多く、夏時は氷塊を貯藏せり、洞道の中央より南方に一岐を出す、其長さ二十五尺許なり、

萬野風穴 大宮口登山道の入口なる大宮町の北方萬野村にあり(登山道大宮口の章を見よ)

人穴 人穴村の北端にあり(裾野巡覽の章を見よ)

姥穴 人穴の近傍にあり(裾野巡覽の章を見よ)

三ッ池穴 (全)

新穴 (全)

鶉場 (全)

青木原御穴 青木原にあり(裾野巡覽の章を見よ)

龍宮 (全)

鳴澤氷穴
 長尾氷穴
 須山口風穴
 此他小御嶽風穴(小御嶽西北)御釜吉田口登道二合目下胎内(劔丸尾)鑪子
 山雷穴(鑪子山南中腹)等ありと雖小なるものに至りては尙數十あり斯
 る洞穴の上部陥落する時は險峻なる熔岩の溝をなすことあり富士山
 麓には未だ斯る構造のものを見る能はずと雖只吉田の西南なる鴈ノ
 穴中のものは或は其遺跡ならんかを疑ふべき點あり。

長尾山西北麓にあり(全)

裾野及裾野湖

火山活動の際は、熔岩及瓦斯体等を噴出すること前に述べしが如し、然れども熔岩は、單に液体となりて流出するのみならず、噴出力の爲に一

部は分離して空中に飛散す、之を形状によりて、火山彈、火山礫、火山砂、火山灰等と稱す、富士山腹に累々たる燒石は即ち是なり、此等の噴出物は、火口附近に最多く、落下堆積するが故に、火山は概ね火口を頂點としたる圓錐体をなし、且傾斜も火口に近づくに従て急峻なれども、微細なる火山砂、火山灰の如きは、非常の遠距離に飛散せらるゝが故に、此等の堆積により、火山の周圍には、傾斜極めて緩慢なる原野を生ずるを常とす、之を裾野といふ。

若し火山活動の際風強ければ、噴出物は一方に比較的多く堆積するが故に、山体の圓錐も傾き、裾野も一方に廣く一方に狹しと雖、富士山の如きは殆ど四邊均等なる裾野を有し、此種の標本としては殆ど完全の者なり。

斯く火山は、噴出物の堆積よりなりしものなれば、火山成生の爲に、他の高地との間に凹窪地を生じ、雨水等を此に湛へて湖水となることあり。

之を裾野湖といひ、磐梯山下の猪苗代湖、日光山中の中禪寺湖の如き之に属す、富士山麓にも裾野湖多く、山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖は即ち是なり、之に甲斐の四尾連湖、駿河の浮島沼、相摸の芦湖とを合せて富士の八湖といふ、何れも水色靛の如く、水に岳影を映じ、風景甚だ佳なり、以上の五湖は最初相連続し、半月状をなして、富岳を西北より東方に圍繞したる一大湖なりしが、其後屢々富士山活動し、噴出せし熔岩の爲に堰塞せられたると、水量の漸次減少したるとによりて、今日の如く多数に分離したるものなり、(此等各湖水の記事は裾野巡覽の章を見るべし)

登山道

富士山は高度の大なるに拘らず、登攀の便宜最多し、即ち四方何れよりも登り得べく、且山麓迄は汽車或は馬車の便を有し、殊に登山者の爲に

は定れる道を存し、山中には宿泊の設備整ひ加ふるに案内助力を業とする者すらあり、近來老人婦女の登山者漸く増加するを見ても明なり、登り口は所々にあれども、普通登山口として人の最多く取るは左の五條なり。

大宮口……又表口といひ、大宮より登るもの(村山より山頂へ七里)

汽車は鈴川にて下車するを便とす。

吉田口……又北口或は裏口といひ、吉田より登るもの(山頂へ十里)

汽車は大月驛にて下り、鐵道馬車によるか、或は御殿場に於て下車し、籠坂峠を越ゆるも可なり。

須走口……又東口といひ、須走より登るものなれども、八合目にて吉田

口の道と會す(須走より山頂へ五里)

汽車は御殿場にて下るべし、夫より馬車の便もあり。

御殿口…又東表口或は中畑口といひ御殿場より登るもの(御殿場よ

り山頂へ八里餘)

須山口…又南口といひ須山より登るものにして三合目にて御殿口
と合す。

汽車は佐野にて下車するを可とす。

山は何れの道よりするも麓より頂上までを十合に分ち各合(所により
の中間あり)に茶屋あり中腹以上のものは何れも石を疊みたる所謂石
室なり一合の距離は道の險易によりて異れども概ね十二三町より二
十町の間において各合に要する時間は凡三四十分乃至一時間なり故
に登山は二日を費せば足れり普通登山者は早朝出發して八合目或は
頂上に宿泊し翌朝日の出の壯觀を眺め夫より噴火口の一周に半日を
費し午後に下山するなり。

各道共に山麓に馬返しといふ地あり之より路險にして乗馬を返す意
味なれども實際は此より以上にも通せり馬返しを過ぐれば太郎坊あ
り休憩所なれども宿泊をもなし得登山の必要品は此にて辨すべし之
より各登山道の記述に及ばん。

一 大宮口

鈴川驛 大宮口登山者の下車驛にして其西南の海岸一帯を田子浦
といひ勝景を以て名あり然れども上古に田子浦といひしは富士川口
の西なる蒲原の海濱にして山邊赤人が田子の浦ゆ打出て見れば眞白
にぞ不盡の高根に雪は降りけると詠みしは蒲原の海濱なり然るを何
時の代よりか田子浦なる名稱は今この地へ移り蒲原の海濱は名を失ふ
に至りぬ驛の南方に天香久山といへる砂丘あり地藏堂を存す俗に砂
山地蔵といふ此地眺望頗る佳なり又驛より數町進みたる所に柏橋あ

り富士山の正面を望むとて古來名あり。
 吉原 吉原は昔此東南にありしが延寶八年津浪して此へ移り始の地を元吉原今の鈴川といふ此地より十里木に出で富士東麓へ出づる間道あり町の北方今泉村に善徳寺の址あり善徳寺は嘗て今川義元僧たりし時住みし所にして又元和三年徳川家康の棺を久能より日光へ移すとき宿次せし寺なり又所謂富士沼の址は今泉の水田なりといふ説あれども確ならず殊に源平富士川對陣の際善徳寺は東軍の陣營にして水禽の飛び立ちしは附近の富士沼(今の水田)なりと記せる書もあれども誤なり源平對陣は西軍は蒲原東軍は之が對岸なる加島なりしが如し。

福泉寺 鷹岡村大字久澤にあり五郎時致斬首せられし所と傳へ寺内に曾我兄弟の墓あり又虎御前が草庵を結びたるは此寺なりと傳ふ

然れども曾我の復讐事件は此より北方四里を距つる狩宿にて起りし事なり而して十郎は鬪死し五郎は捕へられて斬らる今其墓が此地にあるは恐く後人の偽作ならん只狩宿に墓なきを怪むのみ。

入山瀬 近年水力を利用して大製紙場を起せり斯る僻遠の地に文明式なるエネルギーの利用を見るに至る之も科學的智識の進歩。

大宮 町の西に淺間神社あり境内櫻樹多し祭神は木花開耶姬なりと稱すれども異説多く定め難し畢竟富士の山靈を祀れるものなり什寶には元弘建武の繪旨足利今川北條武田等の證文多く又兵具甲冑の精巧なるものあり社の東傍に有名なる湧玉の池あり登山者の身體を淨むる所とす此水極めて清冽なれば町内十餘ヶ所の製糸所は之を利用せり此他町内の富雲霧に及星山の倭文神社は共に古き神社なり。萬野の熔岩洞道大宮の北萬野村の田畝中に觀音穴大日穴棺穴穴

烟等數個の洞穴あり、即ち前に述べたる熔岩洞道にして、觀音穴は最初四十尺許は並行せ、東首をを生じ、孔道の彎曲せし所より奥には熔岩鐘乳多し、長さは彎曲部まで四十尺許、夫より五六尺許あり。大日穴は内部の構造極めて完美し、此種の洞道中、最も完全のものなるべし、熔岩鐘乳多く採集し得べし、長さは二千尺許にして、夫より奥は泥濘の爲め進むこと困難なり。槍穴は所々に没落せる所ありて、爲に平滑なる熔岩面を見ず、長さは五百尺許にして狭窄せり。穴烟は入口極めて狭きが故に、匍匐して漸く入ることを得べし、熔岩鐘乳あれども、穴は甚だ長からず。

村山 今は近傍諸村と共に富士根村といふ此より二里餘にして八幡堂下に至る、大宮口登山道の一合目に當れり、此より草野三里、木立三

里、砂山三里、胸突八町と稱へ居れども、實際の里數は遙に短し。富士山は、何れの方面にも山麓に雜草の裾野あり、夫より以上は大森林の一帶あり、其幅は所によりて異れりと雖、巨幹大樹、蕨藪として繁茂せり、之を木立といふ、其以上は總て燒土焦石の荒野にして、之を燒野といふ、故に登山者は何れよりするも、必ず此三帶を通過せざる可らず。

山岳の凝結作用 山麓馬返より路漸く傾斜を増し、凡三合目までは、縦唐松等の老松、森々として枝を交ふと雖、夫より以上は、喬木漸く減じ、灌木相加り、白雲漸く深くして、陰氣人に逼るを常とす、これ濕氣を含める風の山に衝突し、凝結して雲霧となれるを以てなり、此山の中腹、常に多く雲を見るは、此雲霧にして、登山者は此の雲帯に遭遇すること多し、五合目に至れば、樹木なく、只雜草の間々點々たるのみ、六合目以上は

り、富士山の正面を望むとて古來名あり。

吉原 吉原は昔此東南にありしが、延寶八年津浪して此へ移り、始の地を元吉原(今の鈴川)といふ、此地より十里木に出で富士東麓へ出づる間道あり、町の北方今泉村に善徳寺の址あり、善徳寺は嘗て今川義元、僧たりし時住みし所にして、又元和三年、徳川家康の棺を、久能より日光へ移すとき、宿次せし寺なり、又所謂富士沼の址は、今泉の水田なりといふ説あれども確ならず、殊に源平富士川對陣の際、善徳寺は東軍の陣營にして、水禽の飛び立ちしは、附近の富士沼(今の水田)なりと記せる書もあれども誤なり、源平對陣は西軍は蒲原、東軍は之が對岸なる加島なりしが如し。

福泉寺 鷹岡村大字久澤にあり、五郎時致斬首せられし所と傳へ、寺内に曾我兄弟の墓あり、又虎御前が草庵を結びたるは此寺なりと傳ふ。

然れども曾我の復讐事件は、此より北方四里を距つる狩宿にて起りし事なり、而して十郎は鬪死し、五郎は捕へられて斬らる、今其墓が此地にあるは、恐く後人の偽作ならん、只狩宿に墓なきを怪むのみ。

入山瀬 近年水力を利用して大製紙場を起せり、斯る僻遠の地に文明式なるエネルギーの利用を見るに至る、之も科學的智識の進歩。

大宮 町の西に淺間神社あり、境内櫻樹多し、祭神は木花開耶姫なりと稱すれども、異説多く定め難し、畢竟富士の山靈を祀れるものなり、什寶には元弘建武の繪旨、足利今川北條武田等の證文多く、又兵具甲冑の精巧なるものあり、社の東傍に有名なる湧玉の池あり、登山者の身體を淨むる所とす、此水極めて清冽なれば、町内十餘ヶ所の製糸所は之を利用せり、此他町内の宮、及星山の倭文神社は共に古き神社なり。萬野の熔岩洞道 大宮の北萬野村の田畝中に、觀音穴、大日穴、檜穴、穴。

烟等數個の洞穴あり。即ち前に述べたる熔岩洞道にして、觀音穴は最初四十尺許は並行せ

を生じ、孔道の彎曲せし所より奥には熔岩鐘乳多し、長さは彎曲部まで四十尺許、夫より五六十尺許あり。大日穴は内部の構造極めて完美し、此種の洞道中、最も完全のものなるべし、熔岩鐘乳多く採集し得べし、長さは二千尺許にして、夫より奥は泥濘の爲め進むこと困難なり。

槍穴は所々に没落せる所ありて、爲に平滑なる熔岩面を見ず、長さは五百尺許にして狹窄せり。穴烟は入口極めて狭きが故に、匍匐して漸く入ることを得べし、熔岩鐘乳あれども、穴は甚だ長からず。

・村山 今は近傍諸村と共に富士根村といふ、此より二里餘にして八幡堂下に至る、大宮口登山道の一合目に當れり、此より草野三里、木立三

里、砂山三里、胸突八町と稱へ居れども、實際の里數は遙に短し。

富士山は、何れの方面にも山麓に雑草の裾野あり、夫より以上は大森林の一帶あり、其幅は所によりて異れりと雖、巨幹大樹翁鬱として繁茂せり、之を木立といふ、其以上は總て焼土焦石の荒野にして、之を焼野といふ、故に登山者は何れよりするも、必ず此三帶を通過せざる可らず。

山岳の凝結作用 山麓馬返より路漸く傾斜を増し、凡三合目までは、椈唐松等の老松、森々として枝を交ふと雖、夫より以上は喬木漸く減じて、灌木相加り、白雲漸く深くして陰氣人に逼るを常とす、これ濕氣を含める風の山に衝突し凝結して雲霧となれるを以てなり、此山の中腹常に多く雲を見るは此雲霧にして、登山者は此の雲帯に遭遇すること多し、五合目に至れば樹木なく、只雑草の間々點々たるのみ、六合目以上は

全山境、峭嶮礫よりなり、行路亦漸く絶えて只微に人の足跡を見るのみ、蓋し疾風砂礫を捲き、人迹も亦從て滅却し、徑をなさざるによる、八合は七合よりも途益峻はしく、燒石削立、尺を進めば寸を退き、一步一喘、呼吸も亦逼促す、是大氣稀薄なるが爲にして、人往々之に酔ふことあり、稱して山中といふ、此邊氣温亦低く、登嶽者は綿入を着用す、九合目より所謂胸突八町といへる險所にして、體を前方に屈して登れば、岩角胸部を衝くの意なり、此邊險難なるは勿論なりと雖、決して名を聞きて驚く程にもあらず、此を過ぐれば即ち山嶺なり。

特色 停車場よりの距離遠く、登山道亦長し、而して路も傾斜大なりと雖、沿道の景に變化多く、森林の密なること五道中第一なり、故に科學的探究の目的としては、吉田口に次で興多し。

二 吉田口

桂川の水蝕 八王子より小佛峠を越え、進めば猿橋驛あり、桂川中央を流る、兩崖相迫りて斷崖數百尺、水勢甚だ急にして、激しては白玉を飛ばし、碎けては雪を散らし、壯快言ふ可らず。

水の浸蝕作用 流水の浸蝕は、甚だ偉大なるものにして、其作用は運搬物の幫助によるなり、凡溪谷には、崩壞破碎せし岩塊の存するが故に、流水は之を運搬流轉するに當り、河底及兩岸を打撃し、之を崩壞せしむ、故に谷は、年々其深さを増し、終には數千尺に餘る、絶壁をなすことあり、米國コロラド河の如き、其著しきものなれども、猿橋の谿も亦好標本なり。

此谿を跨りて一橋高く通するあり、猿橋といふ、本邦三奇橋の一にして、長さ十七間、幅三間、橋に一の支柱なく、奇巧驚くべし、寶曆五年建碑の猿橋記によれば、古の智者猿の跳て谿を越ゆる状を見て、之に倣ひ架したりと、爾後改築すれども、毫も舊觀を改めずといふ。

大月の熔岩流 嘗て富士山噴出の際、流出せし一條の熔岩流は、桂川

の谿谷に沿ひ、遠く猿橋の附近に達せり、故に此邊は總て此熔岩の碌々たるを踏まざる可らず、地學雜誌によれば、昔延暦十九年、富岳噴出の際北方に向ひ熔岩を吐き、桂川に沿ひ、七里を流れて猿橋の東に至りて止む、大月橋にては熔岩層凡六間許の厚さをなし、砂層の上におり、此熔岩流の下部は、不規則ながら柱狀の節理を有せり。

節理 凡て熔岩は、流出の當時甚しき高温なれども、漸く冷却するに従ひ、容積を縮少するを以て、其結果として一定の割目を生ず、之を岩石の節理といひ、其形狀により、柱狀、板狀、球狀、多面狀等の名あり、目下東京にて、公園等の垣柱となせる柱狀の石は、其節理を利用したる天然石なり。

谷村 大月より此地へ馬車の便あり、所謂郡内甲斐絹の産地にして、嘗て小山田氏の居住せし城址あり、又此地の長生寺は、小山田氏の菩提所なり。

北口淺間社 上吉田(福地村)におり、吉田は北口登山道の入口にして、舊神官の家相並び何れも客を宿泊せしむ、登山者は此處にて剛力を備ふ、北口淺間社は近年富士嶽神社とも稱し、三國第一山の扁額を掲げし大華表は、此社前にありて良恕親王の御染筆なり、此社の神主小佐野氏は勝山村に住し、多く古文書を收藏す、史學上参考たるべきもの多し。鈴原の熔岩洞道と熔岩堤 登道の一合目鈴原にある洞道を胎内潜といふ、之に入るものは膝頭に草鞋を着け、燭を手にし匍匐するなり、洞口二間許を肋と稱し、岩石の狀肋骨に似たり、進みて躋石に至る、此邊愈々窄く、次で腹帶子宮等と稱する所あり、地學雜誌に云ふ、吉田口登山道の西に當り、山頂小御嶽より麓の吉田まで、岩角嵯峨たる長堤の如きものあり、是れ貞觀噴火の一大熔岩流にして、土俗之を劍丸尾といふ、其中央に奇異なる空洞數多あり、就中最大にして且奇なるを胎内潜といふ。

其窟内の形状恰も人體の腹中の如く、肋骨の如き紋理を印せり、故に名とす、其洞の内徑初め七八尺もあれど、深く入るに従ひ細く、數多の支洞に分れたり、又其近傍に上端内徑三四尺にして、深さ五六間乃至十間内、外なる圓筒狀の穴數所あり、其直立せるものは井戸の如く、水之に湛へ、其横臥せるものは、水道管の如く、人匍匐して入ることを得べし、又道路より左に當り雁穴あり、累々たる熔岩の堆積よりなり、數多の小孔を有するが故に、里人之を蟹穴といふ、蓋し乳房狀側火山の數多集りたるものにして、中には完全なるもの崩壊せるもの、火口址を有せるもの、熔岩洞道を存するもの等種々あり、殊に最北には著しく崩壊し、只一條の熔岩流、溝狀をなせるものあり、或は熔岩溝の址ならん。

小室神社の古像 二合目にある淺間明神にして、此に窟狀の岩あり、小室の名起る所以か、國志によれば、此社に古像あり、日本武尊の像は文

治五年の背銘あり、又女體合掌の像あり、建久三年の背銘を存す、淺間神像は古作なれども銘なく、武田信玄の像は容貌不動尊に異らすといふ。

小御嶽 五合目にあり、信者多く奉納物亦多けれども、皆巨大を以て名望とす、斧の重百八貫匁、刃の長二尺八寸といふの類なり、境内の西方に天狗の庭と稱する所あり、樹木皆偃伏し、人工を加へたるの觀あり、蓋し風の作用によるか、五合目以上は、樹木なく、定路なく、砂礫愈深し。

火御子 九合目にある白色の石にして、面滑に光澤あり、物能く其面に映す、旭日將に地平線を離れんとするとき、佛體之に映すと傳へ崇信する者多し、之を経れば遠からずして頂上に達す。

特色 熔岩流あり、熔岩洞道あり、殊に桂川の谿谷は水蝕作用の偉大なる力を示し、森林中には採集すべき植物多く、加ふるに大月迄流車の便を有し、尙夫より馬車の助を受くることを得るが

故に興味多くして且便利なり。

三 御殿口

御殿場 御殿口登山者下車驛にして、舊名は杉中村と稱せしが、元和三年家康の遺骸を、久能山より日光に移す時、此に假營を設け、俗に之を御殿といひしより、終に地名となれり、登山者は此より仁杉、中畑等を経て須山口三合目に相會せり、此登山道は鐵道線路と最も接近し、且東京に近きを以て、近時此道を撰むもの多し。

停車場より凡二十七八町にして、登山道の入口なる瀧河原與平治茶屋に達し、夫より馬返しを過ぎ太郎坊あり、御殿場より此に至る三里十町ありといふ、太郎坊を出づれば満目只火山礫。

二ツ塚 燒礫を踏で登れば左方に二ツ塚を見る、側火山の一なり、他の側火山が多く森林帯中にあるに反し、此山は小なりと雖、砂礫の荒野

中に立てるが故に、甚だ人目を惹き易し、山頂二個に分れ、西北にあるものは、山頂平坦にして、火口址を留めざれども、東南のものには、小火口を

残せり、何れも寶永噴出の岩屑に被はれ、礫石累々たり。

寶永爆發火口 六合目より左折すれば、寶永の爆發口を俯瞰し得べく、(寶永山は後章を見よ)七合目石室は最も朝日を見るに可なりと稱す、然れども何れとして可ならざるはなし、八合目より所謂胸突八町の險を過ぎ、銀明水を経て絶頂に達す。

特色 此登道は停車場との距離最近く、且登山道の里程も亦短く、殊に東京方面よりは甚だ便宜なるが故に、近時此道によりて登るもの多し、然れども沿道の風景は、單純にして砂礫の場所多く、科學研究の材は至て乏し、故に短時間を以て登岳を試んとするものには、最適すれども、他に研究の目的を有する人には聊單

調なるの嫌あり。

四 須山口

佐野深園及佐野原神社 佐野停車場より西北十餘町の所に佐野深園あり、園に五條の瀑を有し、其水湛ふて池となり、池畔に亭榭を設けて客を俟つ、此近傍にも見るべき勝地多し、又停車場より南方少許の地に、藤原爲冬を祀れる佐野原神社あり、社背に爲冬の墳墓及侍臣十餘人の塚を存す、爲冬は冷泉爲世の子なり、建武二年尊良親王を奉じて足利尊氏と竹ノ下に戦ひ、軍敗れて佐野原に退き死せしことは、太平記梅松論等に記載せり、此社は明治九年、里八相謀りて建立せしものなり。

側火山及須山口風穴 停車場より三里餘にして須山村あり、富士と愛鷹との谿谷に當り、此より二里餘馬返に達す、此間森林多く、緑樹甚だ濃なり、森林の中、路の右方に次郎右衛門塚あり、高さ百四五十尺、側火山

の一なれども、火口址は認め難し、又一合目に當り、路の左方に須山口風穴あり、長さ百二三十尺許、もと百五十尺許ありしが、山上より雪崩ありて破壊せられたりといふ、之より道は三合目に至り、御殿口と會す。

特色 御殿口の開けざりし以前には、登山者多かりしが、今は殆ど此道によるもの稀なり、稀なる丈に景は自然なり、さりとて左のみ研究の材もなし、此寂寥を樂む人は別なれども、好で撰むべきにあらず。

五 須走口

須走 御殿場停車場の西北三里にあり、須走は砂走りの謂にして、昔噴火の際砂礫の降下最多かりし地なり、寶永噴火の際も降灰丈餘に及び、今尙地下深き所より、當時埋没の家屋を掘出すことありといへり、此地より二里にして馬返に達し、更に森林を過ぎること一里半にして一

合目となる之より以上は他と殆ど等しく、八合目に至りて吉田口の登山道と相會せり。

特色 道は御殿口より濶く、須山の如く寂寥なることなく、又鬱密たる森林には各種の植物を採集し得べく、趣味中々多し。

噴火口

登り盡せば千里一目、相模の箱根、足柄、甲斐の天目、金峯、駒嶽、白根、身延の諸山は、皆俯して之を瞰るべく、更に眸を放てば、南端に大島を望み、東方に筑波、日光の諸山、東北に赤城、妙義、西北に淺間、嶽一帯の連山あり、皆指點して之を辨すべく、其他は縹緲として涯際を知る可からず、東南は即ち蒼茫の雲海にして、水天漠々、只視力の竭くるを以て限とし、直下を圍繞する十里の綠野は、所謂裾野にして、宛然碧甍を布きたるが如し、蓋し

此景は奇を以て目せんより寧ろ壯麗巨觀を以て題すべし。

火口壁 噴火口は形殆ど圓形にして、之を内院といふ、即ち淺神間靈の在す處なりとし、信者の崇拜甚だ厚し、四圍の火口壁は絶壁聳立して相連り、所々高さを異にす、故に其高點を呼ぶに又山岳の名を以てす、即ち劍ヶ峯、釋迦嶽、久須志嶽、伊豆嶽、成就嶽、駒ヶ嶽、淺間嶽、三島嶽の八峯にして、八朶芙蓉の稱あり、就中劍ヶ峯最高く、怪岩乃立して火口の西部に秀立せり、野中至氏が越年の石室を設けし地なり、之に隣して一條の潤澤あり、大澤といひ、深さ數百尺、之に次で兩側鑿切せる如き岐道を馬脊といひ、北に巍立せるを釋迦ヶ嶽一名白山嶽といひ、茲に障壁の如き岩石あり、釋迦の割石といふ、夫より東方に久須志嶽あり、久須神社を安置す、吉田及び須走口登山者の先づ到る所なりとす、是より富士東面の外岸に出で、更に其南方には、巨大なる熔岩の帽子を戴くが如き、伊豆嶽あ

り、之より稍々平坦なる安ノ河原に出づ、此地に噴瀆孔あり、到る所より蒸氣噴騰せり、夫より成就嶽となり、次で三島嶽に終る、大宮口須山口御殿口の登山道は即ち此成就三島の間に達す、此に淺間神社を安置せり、社殿質素にして四方は岩石を疊みて壁となし、暴風を防ぐ、登山者は此處に賽して神符を受くるを常とす、本社 of 左右には二三の石室あり、皆登山者の休息宿泊に供するものなり、以上火口の外周を一周するを外輪巡りと稱し、凡五十町あり。

火口内 火口の東北より西部過半に沿ひ、一段低き平坦なる台地あり、即ち火口棚と稱するものにして山頂より低き事百五十尺許、淺間神社より劍ヶ峰に登り、火口棚を経て久須志嶽に至るを内輪巡りと稱し、凡三十六町あり、火口棚は平坦なれども、釋迦嶽の南面に方り一箇の小火口と見るべき凹窪地あり、人之を小内院といふ、平林氏の説によれば、

此は陥没の際生せし凹窪地ならんとの事なり

火口の徑は二千尺許なるも、山上にては空氣稀薄なるが爲に、一見甚だ近きが如く、對壁の構造實に鮮明なり、其内壁は削立して殆ど下降すべからざるも、只南方淺間神社の傍より、岩際を傳へて下る事を得、火口底は平坦なる盆地にして、徑二百尺餘、劍ヶ峰より低きこと六百五十尺餘なり、往時は火口側より下瞰するも、孔底深淵にして明視するを得ざりし由なれども、今は大に埋没し、歴々内部の状態を指定する事を得べし、又以前は坑内に熱氣ありしといふも、現今は少しも之を感せず、故に積雪は常に存在せり。

山上の水 火口は昔時漫々たる水を湛へ、一大火口湖なりし由なれども、今は全く水を存せず、只山頂の水としては、少許の金明水及び銀明水の湧出あるのみ、銀明水は表口の入口にあり、周圍五六尺木柵を結び、

直徑二尺深さ三尺許の井の如きものにて、内面は石を疊み、水頗る清冽なり、一二點を滴下すれば、忽ち凝結して氷となるを以て、氣候の寒冷なるを知るべし、里人は萬古不涸と稱するも、元來其水源は、融雪の火山砂中を漏過し、此處に滲出するに過ぎず、故に夏季炎天長く、雪の融盡せるに際せば、此水も亦乾涸するに至るなり。

噴汽孔 昔時猛威を逞うし、岩片石塊を噴騰せし結果、此秀麗の山を造りしと雖、剩殘未だ全く盡きしに非ず、此は即ち伊豆嶽の東側なる、安ノ河原に於て之を目撃するを得べし、此邊一帶、今尙地上到處より水蒸氣を噴出し、岩石を燐爛し、或は赭色に變するあり、溫度は攝氏八十二度以上にて、容易に湯を沸して沐する事を得、又登山者の卵を埋めて熱せしむる者あり、此噴氣は平日微量なれども、朝夕又は雨氣の時は稍々多量に上騰するを見る、是れ朝夕は寒冷なるを以て、水蒸氣は冷却せられ

て明かに白烟となり、又雨氣ある時には、空中に水蒸氣多きが故に、乾燥せる時よりも一層明かに見得べきを以てなり、斯く熱氣あるが故に、冬期と雖、積雪を見る事少し、又二三十年前迄は、劍ヶ峯にも噴氣ありし由なれども、今は絶えたり、此外、噴氣の跡は、山頂所々に認むるを得べし。

火山彈 火山の噴出するや、熔岩の一部を飛散す、登山者の五六合以上にて目撃せし、茶褐色或は黒色なる岩塊の散布は、即ち之に外ならず、試に此岩塊を採りて熟視すれば、面上に無數の小孔を認むべし、是熔岩中に含有せられし、水蒸氣の逸散せし痕跡を示せるなり、火山彈の完全なるものは、熔岩塊の空中に回轉飛散したる結果として、形恰も甘藷又鯉節の如く、中央に太く兩端に細くして、且兩端に少しく捩れたる條痕を存するものありと雖、此は其數甚だ多からず、概ね一種皿若しくは坩堝の如く、中に凹窪を存するもの多し、是火口より飛揚されたる熔岩塊

その粘質少きが爲に、前者の状を呈せずして、地上に落下の際強き勢にて打付けられ、以て此の如き形を得しものにて、恰も餅の如きものを激しく地上に投げ付けたる時と同じく、中央凹み周邊に盛り上げるものなり、此は多く火口四近に散在し、又伊豆嶽の東方には巨大なる繩狀熔岩の散在を見る。

寶永爆發火口

寶永年間に爆發せしものにして、之を新内院といふ、富士の東南山腹にありて其形瓢の如し、火口内には數多の岩脈峭立し、宛も屏風を立てしが如く、火口底の深さは寶永山より凡千五百尺許なり、所謂御中道と稱し、富士の中腹を一周するの途は、必ず此火口底を通過するなり、今参考の爲に中道巡りの道程を記さん。

表口五合目より大澤まで 三里

大澤より北口五合目まで 五里

夫より須走口五合目まで 二里

夫より中畑口六合目まで 二里

中畑口より表口に歸る 一里

火口の四周及び下底は、爆裂當時の石彈散在し、又其爆裂に伴ひて、地下より噴出せし少許の岩漿は、所謂火山彈となりて散在す、人之を鯉節石或は茗荷石といふ蓋し其形状の似たればなり、火口底には高二三十尺許の小丘あり、噴火當時に於ける石彈砂礫の推積せしに據るならん。人往々寶永山を以て寄生火山の如く説くことありと雖、全く然るにあらずして、地下に鬱勃たりし水蒸氣の、突然爆發して少許の熔岩を出せしものなり、其後暫時噴流孔となり、四近の岩石を霉爛せしめし形迹明

かなれども今は全く微温をも有せず、斯く此火口は山體の一部を飛散せし爲、山坂の一部に宛も彫られたるが如き凹處を生せしを以て、火口壁の下方に位する部分は、孤立して宛然小丘の觀を呈せしものにして、即ち寶永山は爆裂火口壁の一部たるに過ぎざるなり。

裾野巡覽

富士の山麓を一周するの謂にして、鈴川停車場より御殿場停車場まで、里程凡二十六里餘あり、其間には深林あり、曠野あり、水晶簾を懸くる瀑布あり、瑠璃盤を磨ける湖水あり、殊に人工の加はらざる所廣きが故に、自然の風趣掬すべきもの多く、科學的研究の材亦豐なり。
吾人は前に大宮口登山者の爲に、鈴川より大宮に至る沿道の事は已に述べたり、今は大宮より更に岳麓を迂回する順序に従ひ、諸君を案内すべし。

べし。

萬野の風穴 大宮の東北にある熔岩洞道なり、(大宮と遠からざるを以て大宮口登山道の部に記載せり)

本門寺と大石寺 本門寺は北山村にあり、日蓮宗富士五山の一にして、日蓮の弟子日興の開基なり、堂宇壯嚴にして一里の遠方より望み得べく、又境内には種々の堂塔及風景の掬すべきもの多し、又此西方上條村に大石寺あり、是も五山の一に數へられ、境内より駿河灣及富岳の眺望甚だ宜し。

井出館の舊址 建久四年、賴朝狩獵を此裾野に催せし時、旅館を置きし所にして、此地を狩宿といふ、今は白糸村の大字となれり、此館址と傳ふるは、目下井出傳吾の宅地となり居る所にして、同家には賴朝より拜領の太刀、盃等を藏すといふ。

此地は曾我兄弟が工藤祐經を刺殺せし所にして、狩宿に曾我八幡とて兄弟を祭りたる小祠あり、虎女が十郎を追慕し、今一度井出の屋館を見ばやとて來り、此社は如何なる神ぞと里人に尋ね、曾我兄弟の御靈と聞きて、昔に歸る心地し、七日七夜參籠の事を曾我物語に記せるは、此の社の事ならんとの説なり。

白糸の瀧 白糸村大字原村の北にありて、芝川の上流なり、高さ八十七尺、幅四十尺、雄瀑雌瀑の外、無數の小瀑糸の如く懸り、觀望甚だ佳なり、近傍に加茂季鷹の碑あり。

時知らぬ雪けの水か神代より

とはに落來る白糸の瀧

人穴 上井出村大字人穴にある熔岩洞道なり、長さ凡百二十三尺許にして南に轉じ、尙百尺許進むことを得れども、彎曲部に至れば孔徑急

に小となり、泥濘深く、瀦水をなせり、嘗て仁田忠常此穴に入りて一晝夜を費せしことを東鑑に記し、又古史傳には天久年間角行東覺といふ者、富士修行をなし、百六歳にて此の穴に入定のことを記せり、洞の西北に角行真人等の墓及淺間神社あり、又洞内に二小屋を設け、富士講者の籠り所となせり。

人穴附近の熔岩洞道 人穴の名は廣く世人に知られたれども、此附近には人穴以外の熔岩洞道尙多く群集せり、吾人は人穴を見ると共に、又此等の洞穴を究めんとす、新穴は人穴の東北にあり、左右二道に分れ、右は長さ百五十尺許、左は三百尺許あり、構造完全にして、熔岩脱出の狀歷々として見るべく、此等の研究をなすに妙なり、此背後にも又一洞穴あり、之を鞠場と稱す。

姥穴は人穴の北にありて、長さ百七十八尺、短き熔岩鐘乳の垂懸するあり。

れども崩壊せし所多し、此洞穴の東北にも三ッ池穴あり。
 上井出より道路二分す、一は甲府街道に従て北行し、本栖精進等の
 湖水を賞し、夫より鳴澤に出づるものにして、一は直に北北東なる
 鳴澤に通ずる間道なり、後者は側火山中の最大なる、大室山の附近
 を過ぐるのみならず、數多の側火山間を縫ひて通ずるが故に此等
 の研究には甚だ妙なり、然れども何れの道を撰むかは、旅行者の目
 的如何にあるが故に、此には兩者を併せ記さん。

鳴澤間道の側火山 上井出村より路を北北東に取り進むこと凡一
 里半に及べば路の右方十數町を距てたる所に太平山あり、次で丸山あ
 り、更に左方に傾斜極めて急峻なる片蓋山を見て其の麓を巡り、行けば
 一條の熔岩流に會すべし、試に此點にありて地形に留意すれば、身は側
 火山群に圍繞せられたるものにして、西北半里の所に聳ゆるは富士側

火山中最大なる大室山なり、西南十町許の所に片蓋山あり、東北數町に
 長尾山あり、東方十餘町にして天神山あり、東南には十町ならずして弓
 射塚野頭山あり、一里ならずして白山、内輪山、佐原山あり、今此等の側火
 山に就て略記すべし。

太平山は里人タカガンドと稱する小丘にして、山上に大なる火口を
 殘せり。

丸山は密林中にある小丘にして、巨大なる火口を有せり。
 大室山は高さ四千五百尺許、完全なる錐圓形にして、山頂には深淵な
 る火口を有すれども、坑内は綠樹蒼鬱容易に降るべからず。
 片蓋山は高さ三百尺に過ぎずと雖、圓錐狀を呈して傾斜甚だ急なり
 全山黒褐色の火山礫に被はれ、火口は山頂にありて楯鉢狀を呈し、深
 さ二百尺許の美麗なる凹窪地をなせり。

長尾山は美麗なる圓錐狀をなし、頂上に火口址を有す、坑内は樹木密生せり、此山の西北麓に長尾氷穴と稱する熔岩洞道あり、弓射塚は樹木鬱々たる高さ六百尺許の小丘にして、頂上更に火口と認むべき凹所無し、恐くは乳房山ならん、野頭山は山上に深淵なる火口二個あり、其西北なるを氷池と稱し、四時底所に氷雪を保つ、又白太龍王を安置するを以て、富士詣の導者稀に之を訪ふものあり、全山巨樹密生し、坑内寒冷なるが故に中に小屋を設けて蠶卵の貯藏所となせり、白山は密林中にある小丘にして見出し難し、頂上には底淺き楕圓形の火口にありて、羊齒類簇生せり、内輪山は山頂に火口を有し、富士中道よりも容易に之を見ることを得べし。

路は斯の如き多數の側火山を包める森林帯の中を通過し、以て鳴澤村に達す。

本栖湖 鳴澤間道によらずして甲府街道を進めば根原を過ぎ割石峠を経て本栖に達す。

本栖湖は諸湖中最深のものにして四百尺に達すといふ、水甚だ澄めり、附近の地水利に乏しく、村民は此水を汲みて飲用に供せり。

精進湖 もと西湖と連続せし一大湖なりしを、熔岩の爲に分離せられたるものなるが故に、其南岸は峨々たる熔岩より成り、又池中にも奇形を成せる熔岩の一小島あり、高距は西湖と同じく、里人の話によれば、水準は兩湖常に等しく、地下互に連脈を通せりといふ、蓋し多孔質熔岩の隔壁は、能く水を滲入せしめて、互に脈絡を通じ得べければ、或は然ることあらん、湖畔に精進村あり、ホテルを設く、此邊佛語を以て地名とな

す者多く、此湖も一に生死湖といへり、蓋し富士行者の命名によるなり。青木原の熔岩洞道。精進湖より東方の裾野を青木原といひ所々に洞穴あり、青木原御穴は精進湖の東南に當る森林中にあり、長さ六十尺許、熔岩鐘乳のある部、殊は黝黒にして光輝あれども、其他は黒色なり、嘗て行者此邊に庵を結び業をなせりといふ、此東方西湖の西南に龍宮あり、長さ三十尺許の洞穴にして、崩壊し進むとを得ず、小社ありて順禮者參拜するが故に、其名著し、又之と對して路の南方にも洞穴あり、之を鳴澤氷穴といふ。

西湖。此湖は貞觀の頃まで、精進湖と一なりしが、熔岩の爲に今は斯く分離せられたるものにして、近傍赤池の如きも亦其遺物なり、湖の南に鳴澤村あり、即ち上井出より別れたる間道と相會する地なり。

河口湖。五湖中最大なるものにして、周邊は凸凹屈曲錯雜せり、湖中

に一小島あり、鷗撃島といふ、此湖はもと吐出口を有せしが、熔岩の爲に塞がれ、今は一水溝を設け桂川へ落せり、然れども霖雨ある毎に湖水漲溢し、浸水の害を蒙るのみならず、米穀を他に仰ぐの土地なれば、近時之れを乾涸し、水害を除くと共に、米田を開墾せんと、の企あり、湖畔に河口及船津あり、河口の淺間神社は貞觀年間創建の古祠にして、俗に北口本宮といふ、又船津には古へ番所ありし由、國志に見ゆ。

妙法寺記。湖の南小立村に妙法寺あり、法華宗の名寺にして、日蓮上人柳枝を以て書きしといへる、曼荼羅を本尊とす、境内に一凹石あり、曼荼羅揮毫の際硯となせしものなりと傳ふ、此寺に古記録二卷あり、妙法寺記といふ、又此寺記を勝山記ともいへり。

吉田。吉田口登山道の入口にして、已に前に述べたり。

山中湖。又三ヶ月湖と稱し、諸湖中最高の位置にあり、餘水は桂川と

なりて流出し相模灣に注ぐ、湖水の中央には水の湧出するありて、其温度稍高く、冬期と雖其局部には結氷を見る事無し、又湖水の出口にも水の湧出ありといふ、故に河口湖に比すれば水温遙かに高し。

籠坂峠 山中より一里にして籠坂峠に達す、此坂路は昔の驛路にして藤原光親非命の最後を遂げし地なり、光親は承久年間北條氏の暴戾を憤り、帝を輔けて北條氏を征討せんとし、武運拙くして武家に捕へられ、終に丘麓の露と消えぬ、今其墓は峠の東南須走の原野中にあり、藤原光親卿之墓の七字を彫みたる墓石、轉凄涼を極む。

須走 籠坂より一里餘にして須走に達す、登山口の一にして巳に前に述べたり。

御殿場 登山口の一にして御厨町の一部なり、町内の大字新橋に承久三年殉難の公卿の一人藤原宗行の墓あり。

愛鷹火山

須走口登道の西方富士の南麓に亦雄大なる一消火山あり、之を愛鷹火山となす、山頂數峯に分れ、峻嶺峙立せり、越前嶽、呼子嶽、大嶽は一列となり、位牌嶽、愛鷹山は又一列となり、殆ど並行に配列せられ、此兩列を連接するを鋸嶽といひ、犬牙峭立鋸齒の如く、二個の火口址は此鋸址を挾て相對せり。

熊ヶ谷噴火口 鋸嶽の南にある一大凹窪地にして、即ち愛鷹火山の舊火口なり、絶壁四方を繞りて削るが如く、坑内に矮樹鬱叢せり、火口瀨は西南部を切りて流れ、神谷澤となれり、火口底には一の火口丘なしと雖、巨大なる岩脈突兀して小峰の如き觀を呈し、甚だ奇景なり。

大澤爆裂火口 鋸嶽の北にありて、長き楕圓形をなし、西北に向て一

部を開放せり、内壁甚だ急峻にして、御殿場附近より遠望すれば、山頂の分岐せる間を、深遠なる巨壑の開放せるが如きは、即ち此火山なり、此火山爆裂の時は、満山に繁茂せし樹木を倒し、泥土に混じて東北に推出し、地中に埋没したるが故に、今は里人之を埋木又神代杉と稱し、大澤の入口等より發掘す、其大さ大抵二三抱なるを普通とす。

登山 此山に登るは、原停車場よりするを便とす、山上は極めて壯麗なる眺望に富む、又山上より見るときは、幾多の深遠なる輻射谷は、裂けるが如く四方に開く、里人之を百澤といふ、其谷は何れも深く且峻しきを以て、單に水蝕のみにはあらざるべく、怖くは爆裂の際裂罅を生じ、雨水の更に之を犯したるものなるべし、歸路は須山に下るを便とすれども、道路は女竹茂り、爲に歩行稍々困難なり。

箱根熄火山

その峻、その險、よく雄豪なる關東武士を援けて、八洲を控制せし箱根の山も、今は山姿水態の幽且邃なるに、浴客をして盛夏尙暑あるを忘れしむるの温泉場となり、所謂七湯の名は、箱根八里の馬子唄と共に人口に膾炙する所なり、いざ是より、諸君と共に、雲物奇變の仙境に遊ばん。

沿道

箱根に入るは何れよりするも、旅行者の適宜なれども、通常伊豆の三島より入るか、或は相模の小田原より入るもの多し、又山中にも舊道と新道との別あり、舊道は歴史的興味あれども、道峻しく、新道

は西北に足柄箱根の要險を負ひ、東は酒匂馬入の二大川を控へ、關東無比の要害たり、今の城趾には、本丸、二丸、三丸の址を存し、最高の天守臺に大久保神社を祀る、本丸の一部は宮内省所管となり、其南方小峰曲輪には二宮尊徳翁を祀れる報徳神社あり、此の後方に小峯梅林ありて、花時杖を曳く者多し。

小田原の歴史的名産とも稱すべきものを外郎(ういらう)となす、外郎は一種の藥品にして、其本家を虎屋と號し、四五百年來の舊家なり、支那臺州の人陳氏延祐なるもの、元の順宗に事へて禮部員外郎となり、元の滅ぶるや二君に事ふるを愧ぢ、我が邦に來り博多にて卒す、其子宗寄、將軍の命により京都に上る、醫術に精しく靈寶丹を造る、人之を外郎藥といふと、和訓栞に見えたり、小田原の外郎は即ち其分家にして、一時は天下に流行し、今尙普通の賣藥と趣を異にし、一種の名物として世に著る、香

氣高く茶褐色の丸藥にして、恰も今の千金丹若しくは清心丹の如く、世の所謂菓子のウイ、ラウには非ざるなり。

石垣山と早川 石垣山は小田原城と最も接近せる小山にして、又笠懸山とも稱す、北條早雲伊豆の韭山より起り、小田原城を破る時、鹿狩に事寄せて此の山より攻めし事、小田原記に見えたり、夫より五代九十七年間、北條氏小田原に武威を張りしが、天正十八年秀吉の小田原征伐に際し、松田憲秀父子をして箱根の嶮を扼さしめしに、憲秀は志を秀吉に通じ、爲に豊臣軍は湯本眞覺寺(今の早雲寺)に陣し、又直に兵の幾部を石垣山に遣し、所謂一夜城を經營せしめしかば、流石要險の小田原城も、其咽喉を縊られ、果敢なき運命を見るに至りぬ、秀吉此に陣すること百餘日、其の間に屢々家康を招く、江戸を家康に領せしむべき約束は、實に此の山上にて結ばれしなり、現時は山腹に密柑を栽培し、上部には松林竹

林等あり、頂上の巨松數株、緑濃なる地は舊石垣城の天守臺にして、麓より約十町に過ぎず、四望開濶にして、小田原城を眼下に望み、三百年前豊公の意氣、嘯やと思ひ起さる、松樹の下に小祠あり、又常宮、周宮兩殿下のお手植松あり、背後を下れば斷壁殘壘、所謂一夜城の址は儼然として残り、史興禁する能はざるものあり、尙下れば井戸曲輪に出づ、今は竹藪となれども、昔時の俛を存し、滾々たる清水の湧出すること三百年前の昔に異らず、井の大き一間四方許にして、周圍に高さ一丈許なる土手を曲らせり、元來此山は水に富み、山麓にも旭の水夕陽の水等七ヶ所の井戸あれども、畢竟豊公の石垣山に築城の地をトせしは井戸曲輪の發見、即ち飲料水の多量なるを見込みしものゝ如し。

石垣山下を流るゝ溪流を早川といひ、源を蘆湖に發し、峯巒峻嶂の間を曲折して、海に注ぐ、此下流の地を早川尻といひ、太平記には、元弘の亂

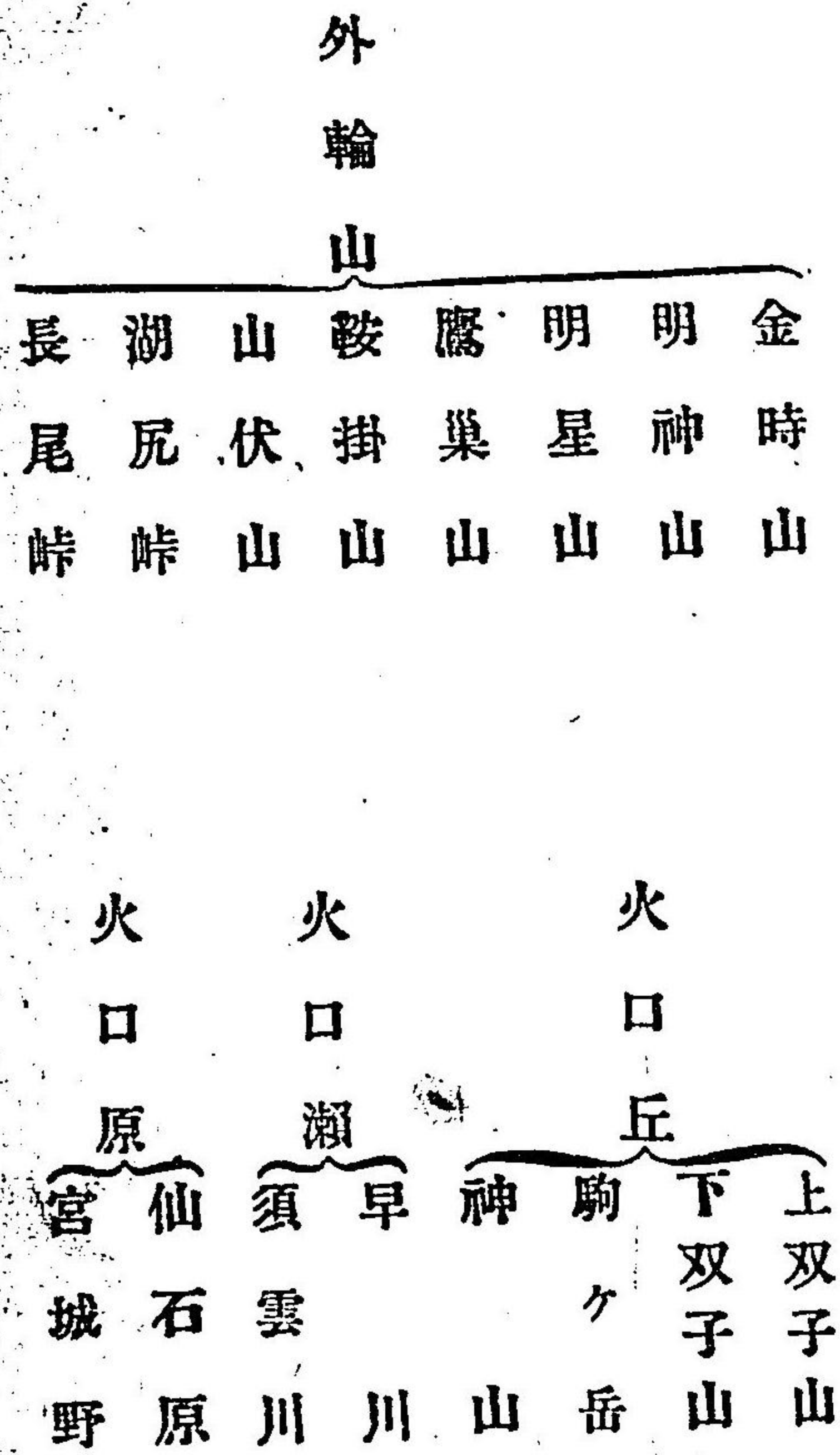
に平成輔を此地に斬りしこと見え、今も成輔の墓と傳ふるものを存し、小田原潮音寺に之れが追吊の碑あり、此河の兩岸は多年の水蝕作用により絶壁をなせる所多く、箱根火山構成の岩石明かに露出し、笑て研究者を迎ふるに似たり、此河は所謂火口瀨なるものにして、箱根外輪山内の水を流し去る通路なれば、箱根に入る最も平易なる路は、此河谷に沿ひて進むにあり、いで之より豫め箱根火山の構造を説き、次に其巡覽に及ばんとす。

箱根山の構造

試に箱根の山態を、北方の足柄峠又は富士山上より瞰下すれば、山頂は參差凸凹すれども、殆ど一樣なる高さの山體を連續して楕圓形をなし、此等一連の山脈は尙中央に數個の秀峯を抱持するを認むべし、是即ち

複成火山なるものにして、箱根は實に其の種の好標本なり。火山の中にて富士山の如き單一なる形狀を有するものを、單成火山といひ、之に反し、噴火口内に新火山を生じ、二重以上の複雑なる構造になれるものを複成火山といふ。今箱根山の構造を考ふるに、最初は直徑四里に擴れる大噴火口を有し、猛烈なる勢を以て噴出せし大火山なりしが、後其の活動を休止すると共に、雨水は其の中に滯りて一大湖水となり、峩々たる山頂に漫々たる碧水を湛え、又噴火口の縁壁は、風雨の浸蝕を受けて漸次に崩壊し、突兀として數多の山嶺を連接したるが如き狀を呈し來りしが、其の後噴火作用再び起り、其の噴出物は堆積して、中央に一群の山榮を生じ、之が爲に湖水の面積は著しく縮少して、僅に其一部を残し、雄大なる複成火山を構成するに至れり。複成火山に於ける中央の新火山を火口丘といひ、外圍の連山、即ち舊噴火口の縁邊を外輪山

といふ、而して此等兩者の中間にある凹地を火口原と稱し、火口原に水を湛ふるときは火口原湖と稱す、又火口原の水を集め、外輪山の一部を破りて流出するものを火口瀬といふ、今箱根火山に就て、此等の一覽を示せば左の如し。



乙女峠

火口原湖(蘆湖)

火山にては、地下の熱の爲に内部に多量の蒸氣を生じ、其張力の爲に山體を崩壊し、爆發することあり、箱根にも此種の遺跡多く、大地獄、早雲地獄、小地獄、湯、花澤等の如き是なり、又火山活動は休止すと雖、其の餘波として或は瓦斯を噴出し、或は温泉を湧出し、よて昔日の名残を存せり。

大湧谷(大地獄)

早雲地獄

硫黄山

瓦斯噴孔
湯、花澤

小湧谷(小地獄)

風穴(昔時噴孔の遺跡ならん)

(上仙石 下仙石 小湧谷 芦湯 湯、花澤)

斯くの如く箱根は複成的構造より成り、且成層火山の標式にして、或時は火山灰を飛ばして層灰岩をなし、或時は岩石の小片を散らして集塊岩をなし、或時は泥流を流し、或時は熔岩を迸出し、此等種々の岩石が層々重疊せるの状は、外輪山の内壁、又は火口瀬の斷崖等に就て、目撃することを得べし、途次此等の説明を試みんとす。

山中巡覽

湯本 箱根山の東麓、早川の岸にあり、國府津より三里、七湯の一にして、温泉は湯板山の麓、早川の南岸なる層灰岩中より湧出し、單純泉にして、無色透明、少しく鹹味を帯び、百十五度の温度を有す、凡そ箱根温泉の

温泉 泉、姥子、木賀、強羅、底倉、宮下

塔、澤、湯河原、堂ヶ島、湯本

温度は火口丘に近きものは高く、遠ざかるに従て漸次低減す、即ち小湧谷百八十度、大湧谷百七十三度、底倉百六十七度等なり。

温泉の種類 温泉は火山活動の名残りたるべき者にして、湧出地方に於ける、一ヶ年平均気温よりも水温高きものをいふ、温泉は温度高きと壓力大なるとにより、種々の礦物質を溶解含有するもの多し、依て其含有物の種類により炭酸泉、鐵泉、鹽泉、アルカリ泉、硫質泉等の名あり、箱根山中にて

も此等性質の異同を究め得べし。

町後に玉簾瀧あり、絶壁の中腹より突然現はれ、人工的の觀あり、地質は火山砂と火山礫との集合したる層にして、其上に黑色なる玄武岩様の熔岩流あり、下に集塊岩及び凝灰岩様のものありて、水を漏すこと無し、其段階をなして落ち來るの狀頗る趣あり、又湯本の西南舊道に接するところに早雲寺あり、小田原北條氏の菩提寺なり、今は荒廢して寂寥を極むと雖、北條氏五世の墳墓は、行客をして轉た昔日の感に堪へざらし

む、宗祇法師の墓亦此寺にあり、宗祇は文龜二年此の地にて卒す、故に終焉の遺跡として建てしなるべく、眞の遺骸は駿河國桃園定輪寺にあり、近傍正眼寺には、曾我兄弟の位牌あり、曾我堂焼失の後此寺に移せしものなりといへり。

塔の澤 湯本を去り、早川に沿ひて登ると六里餘の處にあり、温泉は塩類泉にして、層灰岩と岩脈との接觸部より湧出し、温度は百十一度前後なり、此地三方に丘陵ありて、早川その中央を貫流し、岩脈の爲に甚しく屈曲せり、玉の緒橋を渡れば、朱舜水嘗て此地に遊び、驪山の風致に勝ると謂ひしより、勝驪山の名を得し、塔ヶ峰あり、南腹の阿彌陀寺は、彈誓上人の開基にして、本尊は惠心僧都の作なりと傳ふ、近傍に石窟あり、傳へて上人苦行の處となす。

宮の下 早川の流走ては飛泉となり、湛えては碧潭となる、之に沿て

上る一里餘、宮の下に至る。地は一千有餘尺の高地にあり、明神ヶ嶽、明星ヶ嶽等の山嶺は早川を隔て、北方に聳え、黒雲山、冠ヶ岳、小地獄山、鷹巢山等は西より南に連り、餘脈東に走り、山の盡くる處、遙かに相模の海を雲烟の間に望み、七湯中最も風致に富むの地にして、從て浴客亦多し。泉質は無色透明の鹽類泉にして、微かに鹹味を帯び、温度は大抵百四十度内外なり。泉源を湧出する母岩は箱根火山の基礎をなせる層灰岩に屬せり。この地は山中第一の繁華なる街にして、警察署あり、郵便局あり、宛然箱根中央政府の觀あり。

堂ヶ島 宮の下より降ると五町、早川の南岸に位す。温泉は層灰岩中より湧出する單純泉にして、温度は百十八度内外なり。土地播盆の如く、周圍は高山峻嶺に遮られ、爲に偉大なる眺望無しと雖、幽邃にして最も避暑に適せり。此地は夢想國師の老年遁世せし所なること、禪林僧寶傳

に載せたり。今其址として草堂を殘せり。此地と宮の下との間には、高さ六丈といへる木葉隱の瀑布あり。又平松別墅の園中には高さ十五丈といふ調の瀧あり、共に流れて早川に入る。

底倉 堂ヶ島の隣にあり、鷹巢山を負ひ、山麓は蛇骨川の峻崖を成す。此河到る處に温度甚だ高き温泉を湧出し、且粗鬆なる地中を經過して地表に現るゝが故に、泉中の溶解物は流路に沈澱して所謂蛇骨石をなせり。此の地は新田義隆義を奥州に唱へしも戦利あらず、身を遁れて創傷を療せしに、遂に足利氏の知るところとなり、戦死せしこと鎌倉大草紙等に見ゆ。萬年橋を渡り、木賀への舊道に至れば、大閤風呂なるものあり。横八尺縦七尺許、昔豊公小田原を征するの時、石風呂を設けて朝夕之に浴し、以て戰勞を慰めたるなりと傳ふ。此邊より少しく温泉の湧出ありとも、入浴に適せず。

蛇骨原の蛇骨石 底倉より蛇骨川に沿ひて上れば、河畔に蛇骨原と稱する地あり、即ち蛇骨石の産地にして、今は此邊皆畑となり、諸種の耕作を施せり、畦畦の間白點々たるは、即ち蛇骨石の破片にして、一見白骨に似たり、是れ温泉中に溶解せる固形分の沈澱凝集せしものにして、其層中には夥多の木葉痕を印せり、斯く温泉含有物の沈澱せしものを一般に湯の華といふなり、是を採集せんと欲せば、此邊の斷崖に就きて索むれば、其層を見出すべく容易に掘り採ることを得べし。

木賀 底倉より西北七八町にあり、泉質は鹽類泉にして、昔早雲地獄より流出したる泥流中より湧出す、此温泉は村の南端に露出せる岩脈に沿ひて出で、岩脈の氣孔は、温泉の沈澱物によりて充たされ、又岩石も水酸化鐵を被包を受く、是れ皆温泉の作用に基くものなり、此邊山色水聲亦賞すべく、所謂辟邪泉は、清駛亂石を嚙んで溪間に懸れり。

仙石上下の湯 木賀の西方に下の湯あり、之に對して其西に上の湯

あり、共に泉源を大湧谷に仰ぎ、樋を設けて之を引く、酸性泉にして、激しき收斂性を有し、樋中に多くの固形物を沈澱して湯の華を成せり。

早雲地獄 木賀より山徑を登攀すれば、強羅温泉場あり、此にて頭を回せば、神山の東腹に早雲地獄の噴氣孔あり、是亦往昔大一爆裂の遺跡にして、恰も掻き取りたるが如き播盆形をなせり、噴出瓦斯は主に硫化水素にして、今は其勢大湧谷に及ぶべくもあらざれども、以前は盛に噴出せしこと、今日硫黄泥の推積多きによりても察し得べし、現時之を採掘して盛に製練せり。

大湧谷 大湧谷は一に大地獄と稱す、箱根火山最後の活動にして、今尙猛勢を殘し、地上到る處の裂隙より盛に硫氣を噴出し、常に轟々の響あり、所謂ソルファタラなるものにして、溪流は皆温泉なり、地皮は悉く

赭色の焦石にして軟かく、ステッキを以て地を穿てば、蒸氣忽ち噴出す、此硫氣は噴口外に於て細微の結晶となり、或は泥土と混じて緑灰色なる硫黄泥を作り、此等の堆積はこの四近に見るを得べし、而して附近の岩石は此噴出瓦斯の爲に、表面著しく雲爛せられ、層々剝脱するに至る、又噴口中には所々に滙水ありて、高温度の熱湯沸々す、是れ上下仙石湯の泉源をなすものあり、又流出部には往々高さ二寸有餘の柱狀を成し、中央に細孔を有し、宛も小火山の狀をなせり、是れ内部に含蓄せる瓦斯体の放出により生ぜしに外ならず、噴氣の狀は時に強弱ありと雖、盛なるに際しては、轟々として四近殆ど人語を辨せずといふ、山上に閻魔の臺あり、登臨すれば眼界廣濶、四望禿嶺、只硫烟の淡く濃く所々に立ち昇るを見るのみ、實に凄絶なり、此處より時を下れば姥子に至る。

噴氣孔・温泉の新舊　噴氣孔及温泉は新舊により含有物の種類異なるが

如し、最新しき火口丘なる駒ヶ岳東南麓の蘆の湯は硫質泉にして、最新しき爆裂火口たる大湧谷は硫氣孔なり、而して早雲地獄・強羅温泉・小湧谷温泉の如きは何れも酸性泉にして、之より更に距りたる姥子・木賀・底倉・塔の澤・宮の下等は、鹽類泉に屬し、最も活動の中心に遠き堂ヶ島湯本は單純泉なり、之より推究せば、近時迄活動せし中心に近き所には硫質又は酸質の噴氣孔或は温泉あり、漸く距るに従て鹽質泉・炭酸泉となり、遂に單純泉となり、又同一噴氣孔及温泉にても、漸次年月の經過するに従ひ、温度低下し、酸質孔は硫質孔となり、蒸氣孔は終に炭酸孔となりて、最後に噴出を休止し、酸質泉は硫質泉となり、鹽質泉となり、次で炭酸泉となり、終には單純泉となり、果つるが如し。

姥子　姥子は仙石の西南にあり、温泉は大湧谷の西方なる岩窟中より湧出し、弱性鹽類泉にして、無色透明滋味を帶び、多量に飲用すれば瀉下の効あり、水酸化鐵の固形分を木葉中に沈澱して、其印痕を留む所謂

木の葉石なり、此より乙女峠を越えて御殿場に出づる間道あり、史學雜誌によれば、底倉より仙石原に越ゆる嶺を碓井峠と云ひ、之を足柄の古道とす、日本武尊の通行も此地ならんとのことなり、又姥子より蘆湖の畔に沿ひて箱根に通ずべし。

小湧谷 底倉より芦の湯温泉に至る途中にあり、一名小地獄ともいふ、往時小爆裂の跡にして、現今は僅に岩石の裂罅より、水蒸氣を噴出するに過ぎざるも、嘗て硫質氣孔たりしとは、岩石の霏爛によりて明かなり、泉質は酸性收斂泉にして、少しく腐卵の臭氣を帯び、多量の硫氣と鐵分とを含む、其量甚だ少く、浴用に供するに足らざるが故に、溪水を引き噴氣中を通過せしめて之を補へり。

湯の花澤 小湧谷より進みて岐道を入れれば、湯の花澤の噴汽孔址あり、此地は嘗て小爆裂の跡にて、泉質は單純硫黃泉に屬し、固形分を含む

が故に、之を沈澱乾燥せしめて湯の華を製す。

芦の湯 海拔二千七百六十餘尺、七湯中最高の位置にあり、二子山駒ヶ嶽冠ヶ嶽の山脈西より南に連互し、硫黃火燧の丘陵其麓に起伏し、東北の方僅に開けたり、近傍に阿字ヶ池あり、水淺く、芦葦常に繁生し、殆ど澤と稱すべきものなり、蓋し雨水の低處に滯溜せしものにして、鐵鏽泉此水畔より流出し、餘水は溢れて蛇骨川となり流出す、又此地より二子山への登道あり。

上双子山 美麗なる圓錐形を呈し、巨岩大石山腹に累々たり、往々其轉落を見る、火口は山頂にありて楕圓狀をなし、尙西北麓に瓦斯噴口の遺跡と見ゆるものあり。

下双子山 上双子山と相對して東南に峙てり、前者と同じく圓錐狀にして、山上に巨大なる噴口を有せり、然れども今は其周壁破壊し、幾多

の峯頭に分離するが故に、遠望すれば山頂甚だ凸凹するの觀を呈す、火口底は平盆にして矮樹茂生せり。

精進ヶ池 芦の湯より進むこと西南十餘町の處にあり、碧潭底を見ず、絶て魚類を産せざるより此名ありといふ、山中の高地にありと雖、更に火口の跡と見るべき處なく、雨水の滯溜せしものなり、汀邊古碑あり、應長の碑といふ。

薺の池 楕圓形を成し、外輪山の一部と火口丘との會合地に雨水の滯溜せしものなり、此邊は所謂賽の河原にして石佛多く、昔時の賽の河原は權現阪より北方に折れて蘆湖に至る路傍にあり、又岩壁に彫み附けたる佛像あり、石燈籠も數基ありしが、好事者の爲め賞玩せられて移し去らる附近に曾我兄弟及虎女の石塔と傳ふるものを存し、其の一基に永仁三年の銘あり、又滿仲の石塔と名くるものには、正安二年の銘を

見る又二十五菩薩を彫める大岩塊あり、弘法大師の作と傳ふれども、永仁の年號存するが故に妄説なるは勿論なり、此等を見つゝ進めば深緑の中に一碧を見る是れ蘆湖なり。

蘆湖 一にまんぢが池と稱し、形長く且曲折す、周圍四里三十町、深さ四十六仞、清碧鏡を磨するが如く、所謂

玉くしげ箱根の山の峯ふかく

湖晴れてすめる月影

なるものなり、湖中一半島あり塔ヶ島といひ、即ち離宮の在る所なり、下流を早川といひ、東流凡そ五里、太田原に至りて海に入る。

元箱根 蘆湖の東岸にあり、人家凡そ三十餘戸、山北に鐵道の開通せし以來、衰微に赴き、今は甚だ寂寥たれども、天然の風景は、其四近を粧ひ、古雅愛すべきものあり、近世の山道は、此を過ぎ八丁坂より東に二子山

を曲り、須雲川の谿谷に下るものなれども、元和以前には、八丁坂より北に二子山を回り、早川の谿谷に下りしといふ。

箱根権現 湖の東岸駒ヶ嶽の南麓なる、小丘の上に社殿あり、瓊々杵尊彦火火出見尊木花開耶姬尊を祀る、鎌倉幕府の時に大に之を崇敬し、修法特験の壇場なりき、後小田原北條の時社殿を新造せしが、小田原陣の時兵燹に罹り、更に慶長年間社殿を造營し、英雄豪傑の士多く表矢を獻せしが、戦國を経て漸く衰へ、近年佛僧を分離せしより殆ど舊態を失ひ衰頽甚し。

箱根驛 湖に沿ふて人家百餘あり、是即ち東海道箱根驛にして、盛夏の季に至れば避暑の客群集すれども、平時は甚だ寂寥を極め、古の關趾は只驛の東端にその斷礎を残すのみ。

箱根關の址 箱根に關所を置きしことは、由來古きが如じと雖、箱根

驛の東方に趾を存する、徳川時代に名高かりし關は、元和四年箱根道を開きし時なるべし、關は一方に峻嶺を扣へ、一方は湖水に面し、實に要害の地點なり、昔時の關所改は實に嚴重なるものにして、殊に東より西に赴く女は一層嚴重なりし、關所の掟書なるものを見るに、

- 一、關所を出入る輩笠帽巾をとらせて通すべき事
- 一、乗物にて出入る證戸を開かせて通すべき事
- 一、關より外へ出る女はつぶさに證文に引合せて通すべき事
- 一、手負死人井不審成もの證文なくして通すべからざる事
- 一、堂上の人々諸大名の往來かれてより其關へあるは沙汰に及ばず若不審の事あるに於ては誰人によらず改むべき事

右條々嚴重に可相守者也仍執達如件

正徳元年二月

奉行

箱根舊道 火口丘と外輪山との間、須雲川の谷に沿ひ湯本に至る三里、又西方三島に達する三里二十八町の山道なり。箱根驛を出で、元箱根を經、權現坂を上り、數町にして降坂あり、城不見坂といふ、老松蔭鬱たるの下、銚子坂、猿滑坂、枳殼坂等の急坂を下れば、畑宿に至る。箱根と小田原との間の宿にして、昔は大に繁昌せしも、今は衰へたり、尙進んで大澤坂、割石坂、女轉坂等を下れば、須雲川村あり、夫より坂は益々下りて、右に甕勝五郎腰掛石、左に曾我兄弟の鐵突石等あり、觀音坂より終に湯本に達す。此道は桓武帝の延暦年間、富士山噴火し、足柄の官道を塞ぎし爲に開き、後二道共に交通せしことは、承久の亂、鎌倉評定に足柄箱根兩道の關を固め、官軍の下向を待つべき議ありしを見て明なり。

要するに箱根、足柄は、近世の初まで二道並び通じたりしが、一は迂遠なりと雖、險甚しからず、一は近しと雖、道險なれば、各便に従ひたれども、足

柄は本道にして、箱根は間道なりしなり、然るに徳川時代に至り、天下泰平となり、參勤交替の制も立ち、出征軍を動かす必要を減じ、唯攻め來る軍勢を豫防することの必要を感じ來りしを以て、足柄を塞ぎ、箱根を以て公私の往來となし、西方に對する唯一の防禦線となし、に外ならず。

日金峠 箱根より熱海に出づる間道にして、驛の西端より登ること凡半里、夫より蜿蜒たる鞍掛山の絶巔を行くこと凡三里、此間西には駿河灣の嵐翠を一眸に集め、東には相模灣は勿論、遠く三浦房總の諸半島を雲烟漂渺の中に望み、眼界廣濶、覺えず快哉と叫ばしむ、十國一覽の石碑ある所に至り、湯河原、伊豆山、熱海等任意の地點に下るべし。

熱海間歌泉

夙に間歌泉を以て有名なる熱海は、伊豆半島の東岸、伊豆山の南に位し北は湯河原溪谷を以て箱根火山と交り、西は狩野川に終り、南は柏崎を以て天城山に界し、東は即ち相洋の絶壁。

沿道

國府津停車場より電車小田原に通じ、夫より七里の間、熱海街道には人車鐵道(三時間)の布設あり、小田原驛の南にて東海道と分れ、早川を渡り海岸の懸崖に沿ふて進む、左は洋々たる相摸灘、その風光の明媚なると共に、又頗る險難の地なり。

石橋山 小田原を出でて一里餘、右方一帯の山陵は即ち名高き石橋

山なり、高倉帝の御代、以仁王の令旨を奉じ、平氏の横暴を懲らさんとして成らず、身は平等院の露と消たる源三位頼政の遺志は、大に阪東將士の奮起を促し、時の流人源頼朝亦天下の秋、至れるを知り、決然起て源家の餘黨を集め、治承四年八月廿三日、初陣の兵を此に擧げ、大庭景親の軍と大に山腹に戦ひしが、兵寡敵せずして敗れ、土肥杉山に匿れたれども、搜索の嚴なるを以て、一旦箱根に逃げ、更に眞鶴崎より安房に航せり、然れども此一戦は、實に天下を定むるの基を開けるもの、史上最も注意すべきの地なりとす。

此地は又眞田義忠の戦死せし處にして、路傍に義忠を祭れる小祠あり、墓も亦此に存す、其従僕文三も又戦死し、土人の呼びて文三塚といふは其墓なり。

根府川石 根府川村より堅牢緻密なる暗褐色の安山岩を産す、之を根府川石といふ、板状の節理を有するを以て、之を利用して敷石又は石碑等と成し、甚だ雅趣あり、又此地は小田原藩政の時、番所を設けて熱海伊東の交通を監視せし所なり。

江の浦の遺跡 豊公の小田原を征伐するや、諸將の勞を慰せんが爲に石垣山より眺望に富める此地に移り、茶室を設けて茶筵を張り、將士を招きて共に相樂みたる事ありといふ、其の跡は今に天正庵址として存せり。

岩村と眞鶴岬 頼朝の石橋に敗るゝや、北條時政の安房に向て發航せし岩浦といへるは此地なり、又頼朝の發航せし眞鶴は、此地の東南にあり、其岬端に鶴の窟あり、頼朝石橋に敗れ、景親に追はれし際、主従七騎にて潜れしを、梶原景時見て助けたりといへるは、此處なり、東鑑には或

岩窟と記せり、近時海水浴場を設く。

土肥 土肥は古の郷名にして、吉濱村以南の六ヶ村を土肥六箇村といへり、土肥實平の居城したる處にして、此地の成願寺は其の開基なりと稱し、地内に土肥一族の墓あり、土肥氏の第宅は、此の門前の邊なりと稱すれども、今之を知るに由なし、又頼朝が景親に追はれて匿れたる、土肥杉山といへるは、此邊の背後に連れる森林なるべけれども、今は儘に知り難し。

伊豆山温泉 後に伊豆山を負ひ、東は房總の峯巒を望み、南は遠く伊豆の諸島を眺め、風光頗る佳なり、温泉は瀧の湯、又走り湯と稱し、古より世に知られたり。

伊豆の國山の南に出る湯のはやきは神のしるしなりけり
とは玉葉集に載するところなり、温泉は山腹の岩洞集塊質の層灰岩中

より湧出し奔流して海に入る、無色透明にして明礬及硫黄を含み、少しく鹹味を帯ぶ。

伊豆山神社 小田原街道に向たひる險磴の上に在り、もと關東の總鎮守にして、其別當は走陽山東明寺と號し、三千の支坊を有せし大寺なり。古來朝野の尊崇厚く、賴朝の時代には箱根三島の兩社と共に鼎足の勢を有し、降て小田原北條の時代にも之を崇敬し、又徳川時代にも神田を寄附し、堂宇を建立せしことありしが、其後火災に罹り、殊に維新の後祿を失ひて頽廢に歸し、今は只上の宮を存するのみ、此山の後方は巨樹蔚々古の所謂古々井の森にして、時鳥を以て有名なり、後拾遺集に藤原兼房の歌あり。

五月間こゝろの森の時鳥

人知れすのみ鳴渡るかな

熱海

伊豆山の南凡そ半里、日金山の東麓にありて、三方に山を繞らし、嚴冬と雖北風西北風の暴烈を遮り、東南の一方は漫々たる碧海に臨み、夏涼冬暖の良地なり、舊記に曰く、仁賢天皇の御宇四年、蚊島穗元罪あり獄に死す、天皇屍を熱海の海に投じ給ふ、海波忽ち沸湧、魚鱗介甲悉く爛死す、其後天平勝寶元年、箱根金剛王院の僧萬卷、靈泉の空しく海中に流出するを惜み、鱗介の爛死するを憐み、其泉脈を尋ね、湧出の處に藥師堂を置く、即ち今の大湯にして、權現の社猶存せりと、蓋後人の妄誕に過ぎず、熱海火山の構造 此地はもと一個の火山にして、壯大なる噴火口を有し、其勢力亦甚だ盛なりしも、漸く熄滅に屬すると共に、火口壁は風雨の爲に破壊せられ、今は僅に西南の一半を殘存するのみ、即ち箱根の鞍

掛山より、巉々として南方に連亘せる高所は、古の火口壁の一部にして、又初鳥網代の間は海水頓に淺く、其海底には錕金根又は大根等數多の暗礁あり、試に四圍の山岳と此等の暗礁とを連續する時は、一個の楕圓形を成し、舊時の火口壁を追求するを得べし、斯の如く火口壁の一半のみ甚しく崩壞するに至りしは、後年東部に於て一大爆裂のありし爲、其大部を破壞飛散せられ、加ふるに相洋は太平洋面より暴風怒濤を伴ひ來り、不斷之を洗滌破壞したるに依るなるべし、今日此沿岸に峭岩削立せるは、蓋し此作用を蒙るが爲なり。

斯の如く歲月の久しき今日に於ては、明かに噴火口として見る能はずと雖、詳かに地形を察し、又熔岩流の方向より推考する時は、火口壁の遺跡を知ることも亦難きにあらず、即ち伊豆山の西方、岩戸山、輕井澤、峠、瀧池、山、玄岳、和田峠等は、皆其一部なりしなるべし、然れども火口丘として觀

察し得べきものに至りては、更に形跡なきを以て、之より推察する時は

熱海は單火山にして、未だ火口丘の構成に至らざりしなるべし。

●間歌温泉

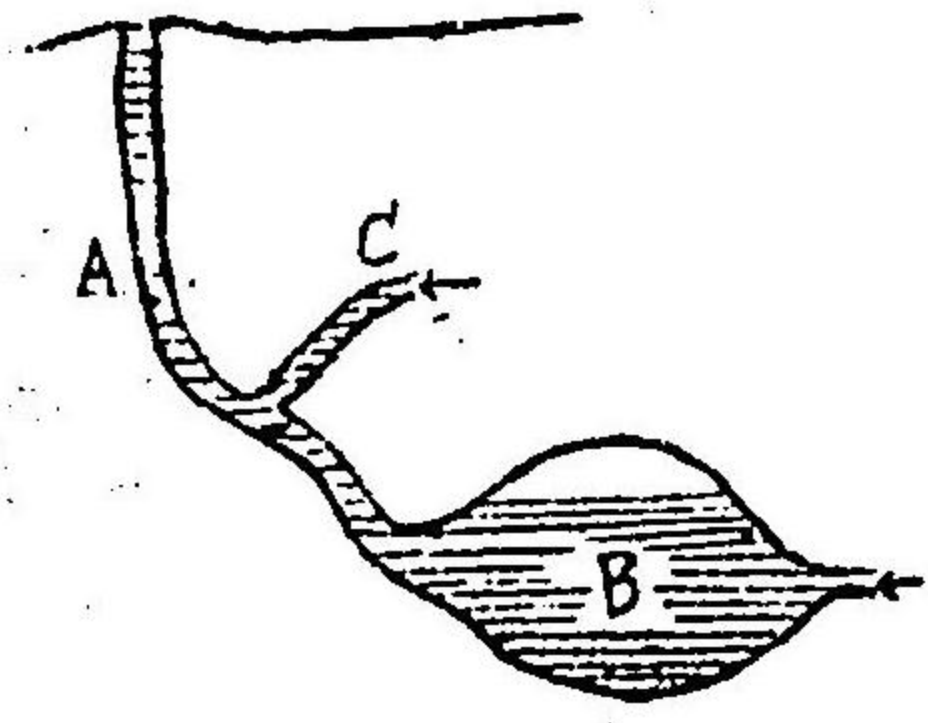
熱海の火山は其活動斯くの如く古く、其變遷斯くの如く

加はり、爲に後人をして妄誕附會の言をなさしむるに至りしと雖、其火山力の餘勢は、今尙絶えずして大沸泉となり、以て昔時の名殘を存せり之を大湯といふ、大湯は本邦著名なる間歌泉にして、噴口に巨大なる石塊を覆ひ、人工を以て横に噴出せしむ、大抵一日五回時を違へずして噴騰し、又一年間に數回凡十二時間繼續して噴出することあり、之を長湧と稱す、大湯の將さに湧出せんとするや、壘石の間に細泡を吐き、恰も蟹の泡を吹くが如し、既にして沸騰の時來れば、恰ら數臺の大ポンプを仕掛けたるが如く、蒸氣と熱湯とを噴騰し、其響雷鳴の如く、近傍に熱雨を降らし、實に悽愴たる光景なり、沸騰久しきにして又寂然、斯の如く或は

眠り、或は躍り、死活交互に起り、其状態實に奇なり、又長湧の後は長休みと稱し、次の十二時間は一滴も湧出せず、其交代時間の正確なる自然の妙といふべし、沸騰湧出の間は頗る危険なるを以て、四方に鐵柵を繞らし、其内に入るを禁せり。

此他清右衛門湯、小澤湯、風呂の湯、河原湯、左次郎湯、野中湯等二十餘戸の温泉、或は岩石の罅隙より、或は砂層より湧出す、斯く奇異の噴出を演じ、其名を噴々たらしむる原因に就ては、未だ明かに之を説明する能はずと雖、今之に對する諸氏の説を述べん。

プンセン氏の説　氏が氷洲の間歇泉に就て研究せし結果によれば、地下に浸入して地熱の爲に非常の高温度に達せし水、地中を循環して坑底に集る時は、其水温は優に沸騰點以上であり、雖、水の沸騰は壓力と關係を有するを以て、上部なる水壓の爲に沸騰することを得



ず、益々温度を上昇し、其熱度終に上部の壓力に勝るに至れば、茲に大噴出を起し、坑内の水盡くるに至りて止む、斯く一旦噴出の止る時は、冷却せる坑外の水、再び流れて坑内に集り、次の温度の上昇を待つものにして、噴出に間歇あるは全く之が爲なりといふ、然れども熱海の如き、長湧、長休等特殊の現象あるが故に、單に此説のみによりて説明する能はず。

本多寺田兩氏の説　明治三十七年兩氏の觀察報告によれば、Aなる洞管ありて深く地中に達し、Bなる空洞と連り、又Cなる支管ありて、他よりA管と連るものと想像し得べし。

今此想像により熱海間歇泉の起因を説明せば、B洞は深き地中にありて、其洞壁甚だ熱く、又洞内の水も

爲に非常に熱し居れども、A管には水を充たすが故に、其壓力の爲に沸騰することを得ず、然れども熱度益々加はるときは、B洞の上部は水蒸氣愈々密となりて漸次水面を押し下げ、或る程度まで押し下げれば、水蒸氣は終にA管に通じて逸出し、得るが故に、此に至りて噴騰を起し、此噴騰の爲にA管内の壓力減するが故に、C管にある稍々低温の水少しく流入し、一時噴騰を中止す、然れどもB洞内は尙多量の熱水もあり、熱度も亦高きが故に、直に又噴騰し、噴騰すればC管より水流入し、斷續的噴騰を幾回する間には、洞内の水も幾分かC管より來りしものと交代し、温度從て下るが故に、終にはC管より多量の水流入し、次の温度の上昇までは、噴騰を休止するに至る、熱海にては之に要する時間は凡三時間なり。

又長湧長休ある所以は、C管より來る水の温度、時に異ればなり、即ち

C管より來る水の温度低きときは、B洞内の温度も早く低降し、噴騰時間短しと雖、若しC管より來る水温高きときは、B洞内の水温容易に下降せず、爲に噴騰時間永く、水の交代すること亦多し、故に長湧は管内の水温高き時にして、之が爲にB洞内の水は悉く交代し去るが故に、其噴出止むときは、再び水温を高からしむるに長き時間を要す、是即ち長休なり。

斯くC管より來る水温の時に異なる所以は、殘存する太古の火脈を通じて、出でつゝある熱瓦斯及熱水の増減によるものにして、長湧と大島噴煙の消長と關係あるを見ても、其等の消息を考へ得べし、長湧長休が定期的に起らざるも亦是が爲なり。

熱海温泉は泉質鹽類泉なり、人或は海岸なるを以て海水に關係ありと説くものあれども、伊豆半島はもと海中に生成せしものなるを以て、凝

灰岩の如き温泉を涵養する岩石中に、鹽分を含有するに由るなり、この温泉又固形分を沈澱して湯の華を製す。

温泉寺 字新宿にあり、臨濟宗にして清水山と號し、授翁宗阿和尚を開基となす、然るに藤房卿の開基なることを論ずる俗説ありて、近時は寺前に藤房卿の碑さへ建てらるゝに至りしと雖、藤房と授翁と別人なることは、史家の認むる處なれば、俗説に誤られざることを要す、授翁手栽の梅と稱するもの門頭にあり、又谷鐵臣が松下清泉甘且冽と賞しける、三點水といふ古井門前にあり。

公園 明治十八年本町を距る北八丁餘の所にある高丘を開き、梅桃を植えて公園となす、老檜蔚然たるの間、清泉の涓々たるあり、幽靜俗腸を醫するに足る、一月の初梅花既に蕾を破り、冬知らぬ熱海の儂をこの園に見る。

初島 海上三里を隔てたる一孤島にして、實朝が

箱根路を我越え來れば伊豆の海や

沖の小島に波のよる見ゆ

と詠めるはこの島なり、民家四十餘戸、曹洞宗の寺院二字あり、一島親敦夜も戸を鎖さずといふ、水仙甚だ多く花葉の長大なるに名あり。

錦浦 熱海より海岸を南行し、魚見崎を廻れば錦浦なり、海岸一帯の岩石波浪の爲に削磨せられ、奇姿怪態言語に盡すべからず、碁盤石烏帽子岩、兜岩、霞岩、五色岩、雀ヶ島、馬背島等は皆其形によりて名づけ、尙西に進めば狗くゞり胎内竇等の石門あり、次に有名なる錦巖の奇觀あり、絶壁數十尺下に大洞あり、五彩の石朝暎に映じて爛然錦の如し、更に進めば觀音窟あり、昏陰其奥を知らず、岩上に觀音の石像を安置せり。

伊豆半島

山水の勝に加ふるに科學的探究の料に富める伊豆は、本土の中央より南太平洋中に突出せる富士帶火山脈の一半島にして、遠くマリアナ群島より起り、延びて小笠原島、豆南七島を生じ、終に此半島を成し、猶秀で、富士の嶽となれり、されば火山の痕跡及温泉等頗る多く、或は永年の風化を受けて斷崖障立せる古き火山あり、或は熄火以來年月淺く明に火坑を存して僅に水を貯へたる火山湖あり、又は餘勢尙存して熱湯を湧出する温泉あり、地文學的研究の材到處に充滿せり、此半島は最初今の七島の如く、大陸を距れたる海上に在りしが、火山の噴出により半島の基礎を作り、再三再四時を移し處を變へて噴出せしより、遂にかく連

接するに至りしものにして、噴出の最古きは猫越火山、次で蛇石の火口開き、更に天城・達摩等の大噴出あり。

天城熄火山

天城山は伊豆半島の中部、相模灘に面して聳え、本國第一の高山にして火山研究上最面白き構造になれり、此山の最高點は萬三郎嶽といひ、海拔四千六百二十五尺、之に次ぐを萬二郎嶽といひ、海拔四千二百九十尺なり、此兩高峰の連續を見るに、彎曲して、弧狀をなし、更に東南に向て筈木山となり、東の一方は欠けて白田川の谷となる、之より見るに天城山は嘗て猛烈なる勢を以て噴火せし時ありて、今日弧狀に連續せる、此等の高峰は當時に於ける噴火口の壁にして、所謂外輪山に外ならず、此噴火口の直徑は一萬二千尺に餘り、伊豆火山中最大のものなり、而して白

田川は此外輪山を破りて流出する所謂火口瀬なり、山體は主として輝石安山岩より成れり、天城山は獨り此大火口を有するのみならず、其周圍には十有五個の寄生火山を散在し、實に火山の形態として一大偉觀を具へたるものなり、今之を順次に列擧すれば左の如し。

●東北に群集するもの

遠笠山

天城山稜の東端に位し、暴風の衝に當るが故に、山頂は著しく風雨の浸蝕を受け、爲に噴火口の如きも、之を目撃する能はざれども、大島及伊豆七島を瞰下し、眼界頗る濶大なり。

松室山

田方郡八幡野村にあり、圓錐形をなして、頂上に火口址を存す。

矢筈山

田方郡池村にあり、巍峨たる双峰をなして、恰も矢筈の如し、依て此名あり。

孔ノ山

矢筈山の西北。

岩山

孔ノ山の西北、田方郡管引と池村との中央。

丸野山

田方郡天見村字管引にあり、頂上に顯著なる火口を存し、火口瀬をなして、北方に開く。

●西南に群集するもの

鉢窪山

田方郡湯島の南にあり、山頂凹窪にして、鉢狀をなす、是即ち火口址なり。

カワゴ平

天城山中萬三郎嶽の西にありて、形狀策に似たり、此火口は地蔵村より白田村へ越ゆる通路となり居れり。

八町池

カワゴ平火口の西南にある火口湖なり。

登尾山

天城峠の南側にあり、浸蝕の爲火口を認めず、山形も亦大に變じて圓錐體をなさず。

鉢ノ山 賀茂郡湯ヶ野にあり、頂上に凹窪地を認む是れ即ち火口址なり。

小池 全郡下河津村

大池 同前

●東北に離れたるもの

大室山 (東海岸の章を見よ)

小室山 (全)

東海岸

断崖多くして平沙至て少なく箱根天城等粗鬆なる火山噴出物の堆積より成る。就中南部には所々に集塊岩の突出あり、風光明媚と言はんより寧ろ壯大なり。

網代爆裂火口 熱海の南方里餘に網代灣あり、三面は鬱蒼たる山嶺に圍まれ、頗る良港にして又漁獵の中心地なり、此灣は舊時の火口なるが如しと雖、熔岩流出の形跡を認めざるを以て、瓦斯體の一時に爆發して直に跡を絶ちたる爆裂火口ならん。

伊東温泉及城址 天城山の東北相模灘に面し熱海より網代を経て八里の南にあり、古來有名の地にして古蹟甚だ多し、就中史上に著しき伊東祐親の墓と傳ふるもの地蔵原の山上に存し、其城跡は和田の山上にありし由なれども、今は已に田園と化し舊態の訪ふべきもの無く、物見の松獨り懐古の料をなす、其他頼朝に關する種々の古蹟あれども多くは附會の説なり、温泉は沖積層より湧出し、成分大抵大同小異にして鹽類泉なり、上の湯野田湯最有名にして、猪戸の湯、出來湯、和田の湯等所々に湧出す、又海濱には海水浴場あり、水清く波穏かにして危険の虞無

し。

小室山と大室山 小室山は小室村の海岸に突起する一小火山にして頂上に火口址あり、大室山は此西南に位し、半島の火山中形體最も完美なるものにして、火山形状の好標本なり、依て伊豆富士の別稱を有し、里俗富士の妹と稱す、頂上に大なる窪みあり、是即ち火口址なり、又南腹に爆裂火口あり、恰も富士の寶永山に於けるが如し。

日蓮上人配流の遺蹟 伊東より壹里餘、小室山麓の川奈に、日蓮配流の際寄寓せしといふ、船守彌三郎の宅趾あり、今は小堂を立て日蓮の像を安置せり、是より南對島村字富戸に海岸山蓮着寺あり、日蓮の舟漂着したる處なりといふ、永正五年伊東の領士今村若狭守の創建にかゝれり、南方日蓮崎の海中にある巨岩、粗岩は、船守彌三郎が日蓮を救ひし處なりといふ、玄武岩の大なるものなり、此より南方赤澤邊迄は、懸崖高く

聳えて波浪荒く、崖岸に題目石、大師窟、橋立等の勝あり。

天城の火口瀬 赤澤の南七曲の險を行けば、一飛泉あり、夫より大川、奈良本を過ぎ一里餘にして白田川あり、源を萬三郎嶽、カワゴ平火口より發し、外輪山を壞決し火口瀬となりたるものなり、俗に白田口といひ、東南地方より天城山に入るの通路なり。

河津川筋 白田川を渡り一里餘にして稻取港あり、翠山突出して碧灣を包み、風光最佳なり、海に天草を産す、是より里許にして河津川あり、源を根越火山群中天城長太郎山に發し、此處に至りて口を開く、沿岸に大瀧、小鍋、湯ヶ野、下河津等の温泉湧出す、淡綠色の凝灰岩層を穿ちたる谷にして、溪中所々に天城より南方に流れ來れる熔岩の一部を露出す、下流の海岸附近には凝灰岩層の間に帆立貝、海膽魚等の化石を藏し、澤田よりは伊豆石を産す、又此地は河津氏の起りし所なり。

白須 白須の海岸は白砂皎々として雪の如く、甚だ美觀なり、此地に白須神社あり、其山上に穴あり釜といふ、恐くは噴火口ならん。

下田 海岸に沿ひて南進すれば、逆川の河口に下田港あり、熱海より十八里、下田灣に枕み、東京沼津清水等に漁船の來往ありて、伊豆第一の良港なり、此地は江戸の繁榮に伴て盛大となり、又徳川時代に近傍河津地方より採金の舉ありて、大に人口を増し、又元和年間此に水關を設けて往復の船舶を改めたり、後嘉永二年には英船此處に來りて通商を乞ひ、安政元年米國船又至る等、我が開國史に名高き所なり、町に海善寺あり、開山詳ならず、素と眞言宗なりしが、天正中僧照善中興して淨土宗に改めしといふ、逆川の東柿崎には嘗て吉田松蔭が夜舟を盗みて米艦に投じたる辨天島あり、この邊一帶の凝灰質砂岩中には、多く海膽類、蔓脚類、葉鰓類、蛟類の齒等の化石を埋藏せり。

長磯と彌陀窟 下田より西南田牛村の海濱に廣き石あり、海中に突出すること數十歩之を長磯といふ、石の中央に一小窪地ありて淡水を湛ふ、村人掬して渴を止む、此水常に盡くることなしといふ、又村の西南に遠谷嶼あり、水際に三個の空洞を存す、蓋し水蝕作用により生せし者にして、上に遠谷社を存す、夫より手石村に至れば、彌陀崎の海中に突出せるあり、満山皆松、その下に阿彌陀堂あり、巨岩削立せる間に彌陀窟あり、浪靜かなる時は舟にて入るを得べし、洞内石鐘乳を垂れたり、入ると數十歩にして暗黒となり、やがて一道の光明燿々として深幽の處より出づ、人眩迷して正視すべからず、蓋し日光の岩間の罅隙より輝くによるなり、此洞穴の左右に浮暉窟、鵜窟、あり、此等三者は内部に於て相連続せりと云ふ。

石廊崎の集塊岩 手石川を渡り佛浦を過ぎ、長津呂の港あり、山を行

達摩熄火山 伊豆半島の西北部、駿河灣の東に方り巍々として天空に聳ゆる圓錐狀の山あり、之を達摩熄火山となす、山上眼界濶達、三保、松原、田子、浦共に一眸の下に集る、山は第三紀凝灰島及び凝灰集塊、岩其基礎を造り、上部には輝石安山岩を現す、天城火山の如く多くの外輪山、側火山を有せず、山嶺の火口は馬蹄形にして、直徑略一萬二千尺、戸田にて東望すれば深谷の我に向て抱かんとするが如きもの即是なり、又火口瀨は溪谷となりて西に開き、戸田に向へり、此山彙中達摩山最高く、海拔三千二百三十七尺、その北に替女峠あり、修善寺より戸田への通路に當れり、此等は外輪山の一部にして、餘脈西行して戸田灣に落つ、北方眞城山の頂に一低地あり、雨水を湛ゆ、之を眞城池といふ、或は達摩火山の側火口ならんか、此山中に石楠花多し、五六月の交花を開く、清香掬すべし、沈香谷の稱之より起る。

西海岸

西海岸は東岸とその風趣を異にし、第三紀層の間に安山岩集塊岩に有すれども、其性脆からざればにや、處々に島嶼を生じ、其風景は東岸の寂寞たるに勝り、頗る明媚の所多し。

田子の浦 根越火山の西麓にして、海水靜かに碧齋を湛えたるが如く、海邊には奇岩多し、北に田子坂あり、西に今山あり、東北に田子島、尊島を瞰下し、遠く富士の秀峰に對して風色開豁なり、赤人が「田子の浦云々」の歌は駿河の田子浦にあらずして、實はこの地なりといふ謬説あり、此北方安良里の入江又一賞の價を有す。

鳥帽子山と波勝岬 鳥帽子山は半島の西南端にあり、直立二千尺に充たざれども、峻阪容易に攀ぢ難し、其西南海岸に淺間門あり、岩石自然

の洞門をなして海中に突出し、奇勝言ふ可らず、故に千貫門の名あり、此等山勢の西南海に迫り、斗出せし所を波勝岬といひ、頂嶺は突兀として

尖銳錐の如く、松樹此に繁茂し、實に絶勝の地なり。

國柱神社の石棒 烏帽子山の東北麓岩科村に、國柱神社と云へる古

祠あり、古鏡、古銚、經文等神寶多し、殊に有名なるは石槌の折にして、當社

に一尺九寸、又當村の山王社に一尺三寸、諏訪社に一尺あり、もと一本な

りしが三斷せるなるべし、人類學雜誌所載によれば、岩科村の神明社(國柱社)

及諏訪社、山王社各一個の靈石を納めありければ、明治二十年社人相

議して之を検したるに、一大石器の破片四段となれるを、其三段を留存

し、三社に藏置したるを知る、其全体は劍ともいふべく、扁圓にして本大

に未尖る、(中略)全長を測算するに五尺四寸餘に及ばん

堂ヶ島の洞窟 岩科に近き松崎は一小港にして、沼津方面へ小汽船

の便あり、此邊鯉節の産に名あり、此より半里の北に仁科村大字濱村あ

り、山脚の海に迫る處に堂ヶ島あり、洞窟を存す、第三紀凝灰岩を穿ちて

なりし者なり、増訂志稿によれば、高さ一丈四五尺、廣さ四五步、長さ六七

十步、潮水往來し、扁舟を通すべし、之を胎内潜(胎内)と稱す、又天窓山嶺に孔あ

りて胎内潜の中天に達す、宛然天窓の明を取るが如し、(中略)其前に島嶼

基布し、風光奇絶、春夏の候舟を泛べて勝を探るもの多し。

土肥 古來名高き土肥郷にはあらず、此邊薪炭の産多し、村の中央に

鑛泉二ヶ所あり、其古湯と稱するは砂礫中より湧出し、穴湯は鑛坑の廢

穴にあり、地僻遠なれば浴客多からず、此地は天正の頃より、盛に金を採

掘せし所にして、坑穴は尙殘存せり。

戸田港 沼津より海上四里半、灣口狭くして風浪穩かに水清く、最海

水浴に適す、長松一帶灣口に斗出せるを小濱といふ、富士は正北に聳え

て白雲の上にその頭を現し、三保、松原、清見、瀉は雲烟の間に相對し、左手には遙かに遠州御前岬の海中に突出するを望み、眺望頗る佳絶なり、人民の生業は漁業なれども、又多く造船業者を出す、これ安政の初め露國軍艦下田にて海嘯に遭ひ、又暴風の爲に沈没し、乗組員一同此地に漂着し、風帆船を此處にて造ることとなり、土地の船大工は之が爲に雇はれ、乗組技師の指揮を受け、初めて西洋形の船を造りしに起因すといふ。

豆北の史跡

源家の歴史に最も關係を有するは豆北の地なり、今や豆相鐵道は三島より起りて大仁に通せり。

三島町及三島神社 三島は昔時國府の地にして、又箱根山麓の驛なれば小田原と共に其名高かりし、此地の本覺寺は應永年間僧日出の創

建にして、堂宇宏莊なりしが、今は衰へたり、驛の西方十數町の路傍に八幡の祠あり、賴朝義經對面の地なりと傳ふれども、妄誕たるは勿論なり、又町の西北小濱に泉池あり、今は小松宮殿下の別邸に屬す、此池は常に水を湛へ、駿豆十ヶ村の用水たり。

三島神社は町の東北にあり、中世賀茂郡の大神を遷祀せる新宮にして、延喜式所載の舊祠にあらず、後世賀茂郡の大祠衰頽し、此地の社のみ著名なるに至りしなり、又三島神社を伊豫より遷せりといふは誤傳なり、祭神は諸家の説種々ありしが、明治五年教部省へ上申して、事代主神と改定せり、此社は賴朝舉兵の時、戦勝を祈り、以來崇敬深く、次で小田原北條及徳川の時代にも甚だ尊崇せり、神庫には古寫本、古器物、武家の喜捨文、祈願文等を多く藏せり。

國府及國分寺の址 國府は三島町の中にありしこと明なれども、位

置は確ならず、盛衰記十六夜日記仁治東關紀行等に、三島神社と並べ記しあれば、府衙と神社とは全じ境内にありしかと思はる、又伊豆の國分金光明寺の址は、三島大社の東方にありて、今塔の森といひ、國分法華寺は三島宿二日市にありし。

柏谷の横穴 下田街道に沿ひて大場といふ地あり、大場十郎近郷は此地の人にて、承久の戦功により、地を下總青砥に賜はりの、青砥藤綱は其末族なり、此地の東を函南村といひ、其中の字柏谷に數多の横穴あり、里人百八穴と稱す、此北方上澤大竹等にも數十の洞穴あり、古代穴居の跡ならん、柏谷の西南仁田は仁田四郎の故里なり。

文覺上人配流の遺跡と國清寺 文覺配流の故を以て名高き奈古屋寺は、葦山村大字奈古屋にあり、法號を安養淨土院といひ、文覺之を重修して寺號を授福寺と改む、近世野火の爲に焼失し、只金剛門を殘せり、文

覺が草庵を結び、毘沙門の像を安置して、平家を呪咀せりといふ、毘沙門堂は此寺の鎮守なりしが、今は國清寺に屬せり。

國清寺は、康安年間、島山國清修善寺城にある時建立せしが、應安元年上杉憲顯造營して大伽藍となせり、奈古屋寺の本尊たりし觀音を以て本尊とす、堂宇極めて宏壯、末寺を有すること五十八寺院、實に一大巨刹なり、什寶には種々美術上の參考たるべきものを有し、境内には名勝多し、願成就院と北條時政の墓 史冊に北條といふは、今の原木四日町等の地方をいひしものにして、願成就院は寺家の守山の麓にあり、今は頽廢して僅に故跡を傳ふるのみ、此寺は北條時政の造營に係り、賴朝も頗る之を崇敬せり、後延徳三年、足利茶々丸、伊勢長氏に攻められて、此寺に屠腹し、降て天正年間、豊公小田原征伐に際し、葦山攻撃の爲、兵火に罹り、後再建せられたるも、微々たる小堂にして、更に昔時の俤なし、近時此寺

の背後より、一石塔を發見したりしが、此は茶々丸の墓なりとの説あり然し輕々に斷定すべきものにあらず。

時政の墓は、願成就院の門前田圃の中にあり、自然石にして高さ三尺余、正面に願成就院殿明盛大禪定門建保三乙亥正月六日逝去とあり、碑の傍に六百遠忌塔を建つ、時政の末路に就ては、古來より其説一定せざれども當時に於ける唯一の史料たる吾妻鏡等によれば、この地を以て終焉の地となせるが如し、其信僞は史家の研究を要する處なり。

●●●●●
 韭山城址と反射爐の遺跡 城址は韭山にあり、今尙本丸外郭内隄等の遺形を存す、長享二年伊勢長氏、此地に移り住して氏を北條と改め、小田原城を取りし後も、多くは此に起臥し、後に此地に卒す、爾後小田原より將を派して之を守らしめしが、天正の頃は、北條氏規之に據り、徳川氏の天下を一統するや、蒙族徳川英長を代官となして之に居らしめ、其孫

太郎左衛門英龍に至り、治聲高く、韭山代官の名天下に知らる。

英龍は西洋兵學を研究し、幕府に建議して、韭山の東南なる大字中村の鳴瀧入といへる所に大砲製造所を建設せしが、功ならずして死し、其子英敏之を再修し、大小の砲數十門を鑄造したり、明治維新に至り廢毀せられしが、今尙反射爐の瓦塔二基を残し、以て當年の俵を存す。

●●●●●
 蛭島の址 韭山の西數町眺望佳絶なる沃野の中に二基の石碑と二株の矮松の立てるあり、是れ蛭島の舊蹟と稱せらるゝの地なり、頼朝が流謫せられたる地なりといは、恰も海洋の一孤島なるが如しと雖、決して然らずして狩野河中の三角洲の如きものに過ぎず、豆州志稿に曰く、往昔狩野川此地を夾流して宛然島の如しと、又曰く、是地昔は草莽にして、草蛭殊に多きに因て名けし證あり、且我邦文字を用うる事粗なるを以て水の抱ける地をば凡て以島名づく云々、是れ信に近き説なるが

如し。

堀越御所の址 守山の麓より北に續ける一帯の平坦地にして畑となり居る地は即ち堀越御所の舊址にして、今尙御所の内と稱ふ狩野川は現今守山の東を流るれども昔は今と異り、流路は山の西なりしが故に北條より西へ堀を越しての御所といふ義なり、此地は古河公方なる足利成氏鎌倉にありて専横なりしかば、澁川義鏡幕命を奉じ、之を討たんとせしも、關東の將士多く心を成氏に寄せしかば、將軍義政の弟政知を鎌倉管領となし、館を構へ關東の統一を企圖せし所なり、北條時政の邸も亦此所なりといふ、若し然りとせば、時政邸の後を堀越御所になしたるものならん、今尙田圃中に、當時の庭石と稱するもの數個點在せり、北條義時の邸址と偽義時の墓 堀越御所の舊址より、狩野川を隔てたる西北に南江馬村あり、江馬小四郎義時の邸地と稱するものを存せ

り、然れども其位置は諸説ありて詳ならず、村内に北條寺あり、堂後の丘上に義時の墓あれども、偽物たるは勿論にして、義時は鎌倉にて死し、且鎌倉に葬りたるなり。

宗光寺の古墳と田京の古瓦 北條地方より南すれば田中村に達す其一部に宗光寺といへる地あり、此の郊野に古墳十數所あり、又田京にある藏春院は、上杉憲實の建立に係る古寺なり、此地に御門といへる大字ありて、其所に癡久昌寺の址あり、土中に瓦片を埋藏す、故に此地を以て國府及國分寺の故地となし、久昌寺は昔の國分寺にして、田京に法華堂の地名あるは、往昔法華寺の舊跡ならん、當國の國府はもと田中に入りしを三島に移せしものにて、御門は府衙のありし地ならんとの説あれども疑はし。

修善寺温泉

豆相鏡道の終點大仁驛より狩野川を渡り、爪生野を過

ぎ、右折して桂川の流に沿ひ、之を溯り行く十餘町の處にあり、桂川は源を達摩山より發し、東北に流れ狩野川に入る。又修善寺川と稱し、奇岩中流に起伏し、河底に一大岩盤を見る、之れ角閃安山岩の露頭にして、達摩山の噴出せる輝石安山岩が、集塊岩に岩脈をなしたるものなり、温泉はその裂罅より湧出し、岩澗の間に蒸氣の沸騰するを見る一奇觀なり、虎溪橋、渡月橋之に跨り、兩岸に市をなす、此地上古は桂谷或は桂郷、又泉の里とも稱せしが、大同年中、空海一寺を創立し、修禪寺と號せしより、遂に村名となれり、鎌倉時代には此地方を狩野庄と稱したり、温泉には獨鈷湯、河原湯、新湯、杉湯、箱湯、石湯、珍湯等あり、泉質は鹽酸泉にして、微かに硫黄を帶び、温度甚だ高し、就中獨鈷湯は最著名なるものにして、中流の岩隙より湧出し、岩盤を穿ちて湯槽とし、板を以て其中を割し、冷湯、温湯を分つ岩上に、獨鈷石標を立つ、天命中、修善寺の大鼎和尚の建てたるもの

にして、此湯を開鑿したる人なりといふ、或は空海の錫を止めし時發見せしともいへり。

修善寺 桂川の北岸なる丘上にあり、門前は即ち虎溪橋なり、石階十

數級を上り、凡そ半町許にして、本堂あり、延暦十七年空海の草創にかゝり、眞言宗なりしが、建長年間、宋僧蘭溪、鎌倉より來り住し、臨濟宗に改め、修禪寺となし、宵盧山と號せり、北條氏の所領となるに及び、延徳の頃、隆溪之に住し、曹洞宗となれり、源範頼此地に幽せられ、建久三年、梶原景時の爲に襲はれて、遂に自殺し、又頼家時政の爲に幽せられ、終に浴室にて暗殺されたり、又永正十六年、長氏、韭山城に卒し、此地に茶毘せし事は、小田原記、東乱記、鎌倉管領九代記等に明なる所なり、降て徳川氏の時には、三十石の朱印地に賜ひ、寺域遠く正覺院に及びしも、文久三年祝融の災に罹り、今は明治廿年修築の佛堂を殘すのみにて、さしも幽靜清淨の禪境

も温泉の爲に騒客雜沓の巷と化したり。
 虎溪橋を渡り、三洲園の傍を過ぎ、少許の處に一切經堂あり、指月殿と稱す、政子が頼家の冥福を祈らんが爲に創建し、一切經卷を藏めたる堂なりといふ、此堂も昔は宏壯なる建物なりしこと、現存の礎石によりても推測せらるると雖、今は見すばらしき風情にして、中に釋迦如來を安置す、一説によれば像の下に石函あり、頼家の骨を納めたりと、或は然らん、經卷の一部は現に芝増上寺にありといふ。

源頼家の墓 一切經堂の左側三洲園に接してあり、五輪の塔高さ三尺許、小屋を以て之を覆へり、墓前には元祿十六年五百回忌に建てたる石標あり、征夷大將軍左金吾云々と刻せり、頼家時政の奸策に陥り、建仁三年九月職を廢せられ、剃髮して此地に幽閉せられ、遂に文久三年七月十八日此地の浴室にて逆臣の毒刃に刺殺さる、時に年三十三、北條氏の

專横乱逆も亦極れりといふべし。

源頼頼の墓 虎溪橋を北に渡り、修善寺の門前より行くこと數町にして右方の山腹にあり、里人御曹司の墓と稱す、一小岡の上に八幡の小祠を立て、中に粗雜なる石造の神体を安置す、側に岩城魁氏の撰みたる蒲侯碑を建つ、頼頼の最後に關しては、吾妻鑑には、建久四年八月十七日參河守頼頼朝臣伊豆國に下向し、狩野茂之字佐美祐茂の預となる配流の如し云々とあれど、卒去の事に及ばず、源平盛衰記には、建久五年秋景時、頼頼を讒し、頼朝の命を以て修善寺に押寄せ、頼頼を自殺せしめ、其餘燼中より首を得て鎌倉に歸りし云々と書けり、按ずるに首を鎌倉に持ち行き、此地には軀體を葬りしものか、果して然りとすも、墳墓の位置等に關しては史料欠乏して之を確定する能はず、只口碑の存するに過ぎざれば、輕々には信を置き難し。

正覺院 修善寺を距る五十餘町の川上にあり、峻崖を削りて洞窟となし一字を建立せしものなり。修善寺舊記によれば大同年間空海修行の舊跡は實に此地なれども、其後全く廢頽に歸せしを、弘治三年武州世田ヶ谷城主吉良頼康の妻、其養子堀越六郎貞基の冥福を祈らんが爲之を再興すといふ、然れども今は一茅堂を存するのみなり、阿呼の瀧驅込の谷驅込の岩等の名勝あり、三伏の日と雖涼風絶ゆること無く、實に好避暑地なり。

修善寺城跡 下修善寺村にあり、一に眞葛山と稱す、兀然として群山の間、に聳ゆ、狩野川は南より、桂川は西より至りてこの山麓に會し、山を狭みて天然の要害をなす、山上の風色頗る佳なり、山中に櫓趾空陸廢井等を存す、正平中足利直義、兄尊氏と不和を生じ、駿河に戦ひて敗走し、伊豆に入らんとせし時、島山國清この城を構へて直義に應じたるものなり。

り、山麓に二三の洞穴あり、徳川氏の初年大久保長安なる者、金を採掘せし跡なりといふ。

旭瀑 狩野川に沿ひ下田街道に出で、太平に到りて旭瀑を見る、樹間絶壁を破て山上より落ち、中央にて二段となれり、高さ三十丈、その位置東に面し、朝日に映じて奇觀なるより此名ありと。

四温泉場 是より山漸く迫り、青羽根村を過ぎ右折すれば上船原温泉あり、南に山を越て吉奈温泉あり、尙南に向ひて月ヶ瀬を過ぎ、門野原に至る、狩野川を渡り川を右にして行けば嵯峨澤温泉あり、これより數町にして西原温泉あり、泉質何れも鹽類泉なり。

湯ヶ島温泉と附近の廢坑 下田街道の一驛にして、大仁を距る南三里半、南は天城山を負ひ、北は狩野の平野を瞰下し、遙に不二の秀峯に對し風景頗る良し、天城の餘脉は蜿蜒として北に馳せ、その間に一大溪谷あり。

り、即狩野川の源なり、温泉は其岩盤の間より湧出す、泉質は鹽類泉なり、幽邃閑雅の地なるを以て、最避暑に適せり。

伊豆の金山として天正慶長・元祿の頃採鑛したるは、繩地・土肥・青野・湯島等の諸地なり、湯島金山は慶長の頃より盛に採掘したる所にして、湯島川に沿ひて行けば、字金山あり、有名なる大久保長安金山奉行として駐在し、一時繁盛を極めたりし所にして、今猶殘存する鑛坑數個あり。

鉢窪山と淨蓮瀑 湯ヶ島に遊ぶ者は、一度鉢窪山及淨蓮瀑を見るべし、鉢窪山は天城山の側火山にして、頂上には噴火口の遺址を存す、然れども永年風雨の浸蝕を受け、只皿狀の凹所となり、時に雨水を滯溜して沼澤の觀を呈す、此山は湯ヶ島の茅野新田より登攀するを可とすれども、夏は茅草繁生するが故に稍々困難を感ず、山上より火口を中心として數條の深谷輻射狀に走るを見る、水蝕作用の結果としては、幅狭く谷

深きに過ぐるが故に一考を要すべきなり、此山の西麓を洗へるは狩野川の上流にして、此に淨蓮瀑あり、瀑は柱狀節理を有する玄武岩より垂懸し、岩崖の眺望已に奇なるに、水量多くして白沫四散し、其壯觀言ふ可らず、瀑の背後に空洞ありて入ることを得べし、洞中は岩石の規則正しき節理を示し、天工の妙人をして驚歎せしむ。

補遺

富士登山の新道 富士登山者は、近來年を追ひて増加せしが、此卷の原稿を書き終りし際、最便利なる最攀ぢ易き新道の開通せられしを聞くと、從來の富士登山の表口道路は、峻坂險路多く困難不便一方ならざるより、土地の有志者は他に良好なる道筋を開通せしめんと、去る五月初旬より工事に着手せしが、此程略ぼ竣工し、目下其道筋數個所へ休泊室

建築の設計を爲し居れり、此新道路は大宮より正北なる山宮村に出で、
 草野木立を経て四合目の石室に達するものにして、此間の里程四里十
 七丁五十間、舊道に比すれば殆ど三里餘を短縮し、且つ舊道の如く峻坂
 險路なく爪先登りなれば、三合目迄は馬匹の往來自由なりと云ふ、今新
 舊道路の比較を示さば左の如し、

舊道 大宮町より村山迄一里半、村山村より八幡堂、馬返迄三里、八幡堂よ
 り一合目室まで廿三町
 新道 大宮町より山宮村迄一里、山宮村より篠坂迄十六町、篠坂よりカケ
 スバタ迄十七町、カケスバタより若荷ヶ岳迄一里半、若荷ヶ岳より
 四合目室迄一里二丁五十間

此登山道に於て観覽すべき場所は未だ明ならざるを以て、後日訂正の
 機を俟て之を記さん。

探科學的旅行案内二卷終

湖東神谷有終編

第二卷



旅行案内

行伴社發行



千里を一瞬の中に集め、万山を指顧の間に散し、雪を嚼み、詩を吟ずるの快は、山に登りて始めて得らるべく、瀟頭に立ちて湖香に酔ひ、旭光を浴びて、軟沙を踏み、風に嘯き、懷を馳するの樂は、海に遊びて始めて知るを得べし、然りと雖、山水の遊行、豈直に快樂のみにして止まんや、明の旺文、盛萬山を叙して曰く、直なるものは以て吾方となすべく、曲なるものは以て吾智となすべく、牙然たるものは以て吾達となすべく、窳然たる者は以て吾家となすべく、廢にして窮なるものは以て我節となすべく、勇にして剛なるものは以て吾奇となすべく、其廢落峻極の勢は以て吾氣を作すべく、其開闢變化の状は以て吾文を發すべく、其生育補養の功は以て吾仁を推すべく、其升降欲正の形は以て吾守を固うすべしと、夫れ山水の洪益此の如く、心胸を

開巻して能く人を世に、道徳を稱揚して能く人を化す、故に東
山に登りて魯を小とせしもの、一度泰山に登れば天下を小と
するに至る、古人曰く田を見るは讀書を見るが如く、大小高下
重人の誠見に資ると、余の山水に對するや、其見聞より小且下
なるを免れずと雖、常に好で山に攀り水に遊ぶの癖あり故に
尙も探究の資料たるべきものは論説を寫し談話を録し、新紙
を讀し、雜誌を翻し、今や其零紙断片、積で篋裡に充てり、故に之
を整理して、一は自己他日の遊に備へ、一は同好諸氏の資に供
せんとするのみ。

丙午仲秋

對岳書樓にて
神谷湖東

例言

一、從來有益なる旅行案内の出版せられたるもの夥からずと雖、多くは名勝
勝地の叙事に止り、科學的に之を記載したるもの稀なり、學術勃興の今日
稍々物足らぬ感なき能はず、本書は其欠陥を補ひ、旅行の快樂と共に、科學
的興味を惹起せしめんが爲に編輯したるものなり。

一、本書は、目的已に斯くの如きを以て、所謂名勝舊址として擧ぐるに足らざ
るも、自然現象の顯著なるものありて、科學的探究の標的たるべき地は之
を記載し、且必用の場合には其學理を示し、併せて之に對する諸家の學說
をも附載したり。

一、本書の分類は縣別によらず又國別によらず、便宜一地方を一部となし、逐
次刊行して各地に及ぼさんとするものなり。

一、旅行は、概ね目的地を推定して出發するものなるが故に、本書には其目的
地たるべき地點を題目となし其沿道及附近の事柄をも記載したり、是學

探科學的 旅行案内第二卷目次

日光火山群

自然的日光

山體の構造 ●風景の成因

日光の沿革

勝道と日光 ●辨覺と日光 ●豊臣氏と日光 ●徳川氏と日光 ●明治維新と日光

沿道

御成街道と例幣使街道 ●宇都宮城址と二荒山神社 ●宇都宮二荒山神社と日光二荒山神社
との新舊 ●二荒山神社祭神論 ●宇都宮家の由來 ●清嚴寺と興禪寺 ●粉川寺址と桂林
寺 ●鹿沼城址と今宮神社 ●藤房卿の遺跡菊澤神社 ●多氣山と荒針の觀音堂

日光の社廟

東照宮 ●日光廟の建築論 ●輪王寺門跡 ●御殿跡 ●光明院の址 ●二荒本宮と四本龍

日光火山群の概観
日光火山群の位置
日光火山群の地質
日光火山群の地形
日光火山群の地質
日光火山群の地形
日光火山群の地質
日光火山群の地形
日光火山群の地質
日光火山群の地形

霧降瀧と其沿道……………四五頁

稻荷川の岩塊 ● 河水の運搬力 ● 外山 ● 小倉山 ● 途上の火山灰層 ● 霧降瀧

田母澤川の溪谷……………四九頁

池石 ● 倉下禁獵地と羽黒瀧 ● 若子神社と寂光瀧

大谷川の沿岸……………五二頁

含滿の淵 ● 大日堂 ● 茨見瀧 ● 茨見瀧の構造 ● 清瀧神社 ● 馬返と前二荒山 ● 猛烈なる火山作用の想像 ● 深澤の地藏堂 ● 剣ヶ峯と般若方等の瀧 ● 中の茶屋と阿殿瀧 ● 黄葉と紅葉 ● 華嚴瀧と白雲瀧 ● 華嚴瀧の構造 ● 巫女石と牛石

男體山及中禪寺湖……………六六頁

中禪寺湖 ● 中禪寺湖の成因 ● 歌ヶ濱と上野島 ● 中禪寺の址と中宮祠 ● 山禪頂と船禪頂 ● 男體山 ● 男體の登道 ● 男體の絶頂

戰場原及湯元……………七四頁

戰場ヶ原 ● 戰場ヶ原の傳説と地理の誤謬 ● 湯湖と湯瀧 ● 湯元温泉

白根火山……………七九頁

白根の登道 ● 山體の構造 ● 前白根 ● 奥白根

日光裏山……………

殺生禁断石と稚兒ヶ墓 ● 八風の嶮と七瀧 ● 箱石金剛唐澤の宿 ● 女貌山と飯ヶ峯 ● 帝釋山と馬立 ● 馬立の物品交換 ● 小眞名子山 ● 大眞名子山と千鳥返 ● 志津の宿と男體の要道 ● 太郎山と老婆閣

足尾及庚申山

足尾銅山……………九四頁

山體の構造 ● 鑛脉と鑛物の種類 ● 坑内の状況 ● 工場的情況 ● 鑛毒事件と鑛毒豫防法

庚申山……………一〇二頁

山體の構造 ● 集塊岩と浸蝕作用との關係 ● 登山道 ● 山中巡覽 ● 千疊ヶ箱の昔譚 ● 庚申董の採集地 ● 庚申董の形状

鹽原火山群

山體の構造

一〇九頁

鹽原火山 ● 釋迦ヶ嶽火山

山中巡覽

一一二頁

關谷と笹川 ● 大綱と附近の岩脉 ● 白雲洞と材木石 ● 材木石の成因 ● 福渡と附近の化石 ● 天狗岩と野立石 ● 斷層面 ● 鹽釜と大岩脉 ● 鹽湯と鹿股川の溪谷 ● 畑下と須卷 ● 門前と妙雲寺 ● 古町と附近の化石 ● 源三窟と八幡社 ● 古湯本と赤川溪谷 ● 新湯と藤山

那須火山群

山體の構造

一二八頁

三本鎗火山 ● 南月山火山 ● 茶臼火山

温泉巡覽

一三一頁

那須野原 ● 湯木温泉と殺生石の原 ● 高雄股 ● 御段林 ● 辨天湯と苦土澤噴氣孔 ● 大

茶臼嶽

一三七頁

登山道 ● 山頂の噴口

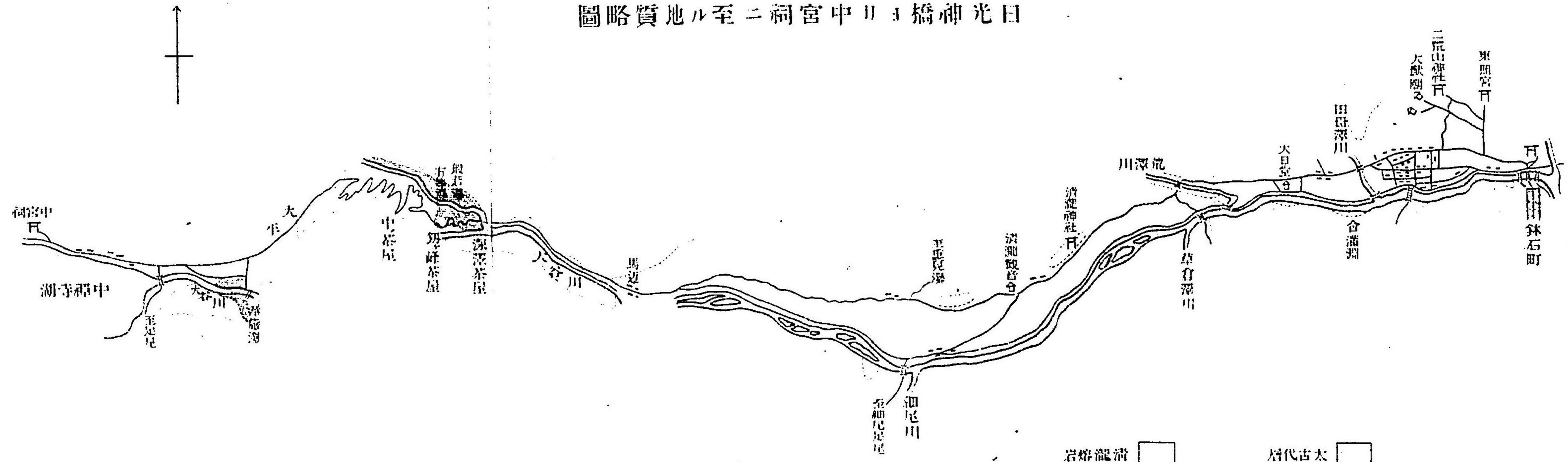


挿圖

- 日光神橋より中宮祠に至る地質略圖
- 鹽原温泉沿道地質略圖
- 白根山頂の畧圖
- 鹽原火山群の噴火口の想像圖
- 節理の成因を示す圖
- 那須火山群の噴火口想像圖
- 茶臼山頂の噴火口圖

科學的 旅行案内 第二卷 目次 終

日光神橋に中宮二至ル地質略圖

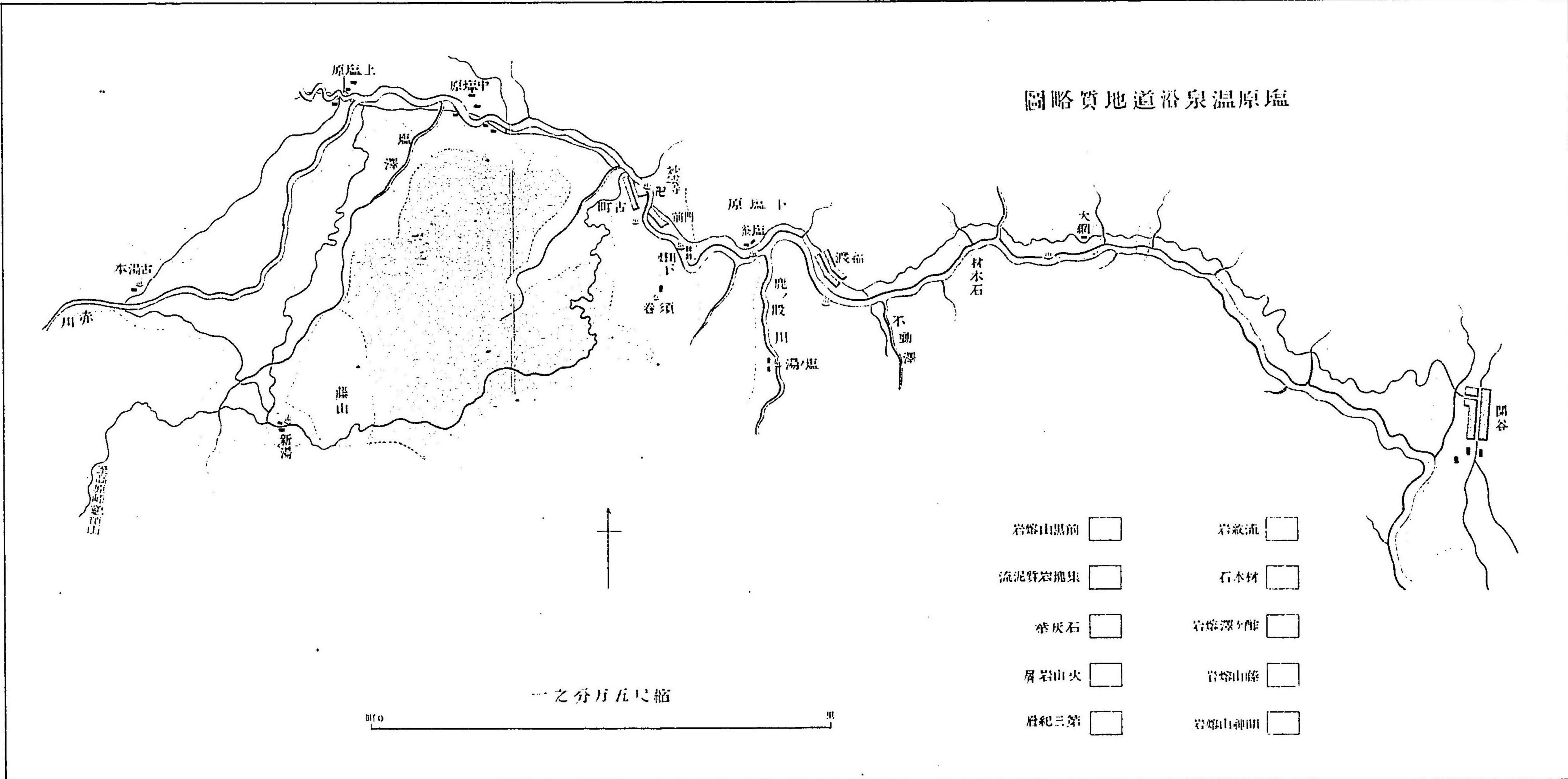


- | | | | |
|------|---|------|---|
| 岩礫混積 | □ | 層代古太 | □ |
| 岩礫赤丹 | □ | 岩斑英石 | □ |
| 岩礫礫系 | ■ | 岩礫生相 | □ |
| 層岩山火 | □ | 岩礫見裏 | □ |

縮尺五分一



圖略質地道浴泉温原塩



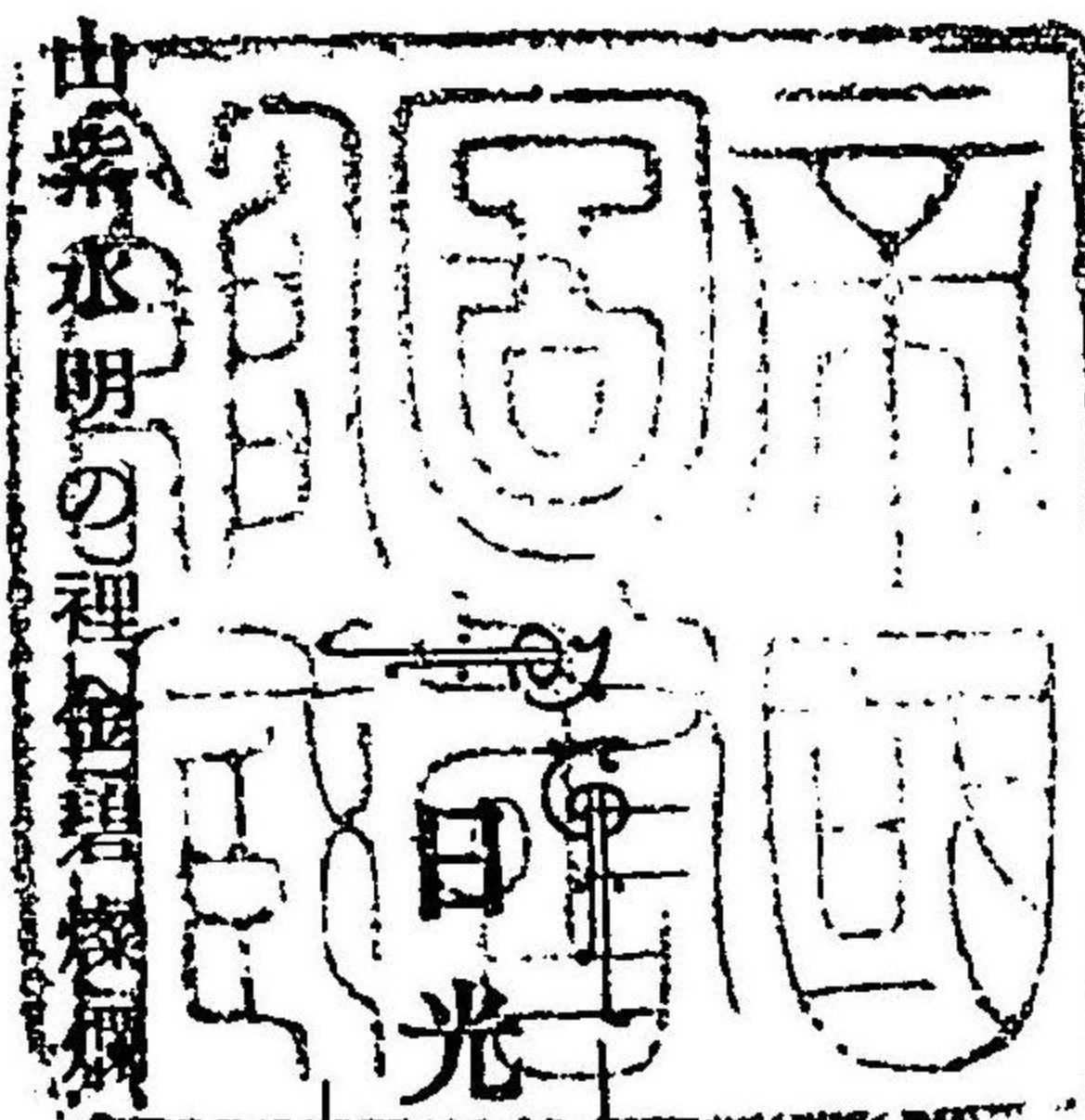
圖原土學原金

科學的
探 究

旅 行 案 內

第 二 卷

神 谷 有 終 編



日 光 火 山 群

山系水明の裡金碧燦爛人工の精華は天然の秀麗と相俟ちて美を凝し、
 麗を盡し、管に本邦に其名を擅にするのみならず、今や世界の勝地に數
 へらるゝものは、晃山の景なり、然れども、此地や一群の噴火山にして、男
 體白根、袈裟丸、赤薙、女貌、太郎、大真名子、小真名子等の如き數多の山嶽は、
 前後幾回、天を焦し、地を動かし、熔岩を流し、岩塊を飛ばし、猛威寄るべか

らざりし活動の結果として生じたるものなり、余は先づ茲に自然的日光を説きて、次に山中の奇勝を探らん。

自然的日光

山體の構造 日光は數多火山の集合にして、山體の構造上より之を分つときは、月山火山、赤薙女貌火山、大眞名子火山、小眞名子火山、太郎火山、男體火山、白根火山、温泉火山、袈婆丸火山の九となす。此等の噴出せし年代の如きは、一々明にすること難しと雖、岩石の性質等より推考するときは、温泉嶽、白根山は最古く、之に次で袈婆丸火山噴出し、後更に赤薙女貌火山及月山火山の噴出あり、而して後年に至り、大眞名子、小眞名子の兩火山は、女貌山の裾野を破りて噴起し、太郎山も亦殆ど之と同時に成りしもの、如く、男體山は最も新しく噴出せしものにして、山體の

成生以來歲月尙淺く、風雨の浸蝕を受くること割合に少きが故に、今も完全なる圓錐體を呈して、火山の常態を示し、殊に頂上には噴火口の址を殘せり、然れども、永く噴火の餘燼を殘したるは白根火山にして、現に明治六年にも、大爆裂ありて附近の地に灰塵を降らし、今も尙時々山體の鳴動することあり。
風景の成因 日光火山群は、西方淺間火山より、妙義、榛名、赤城等の諸山を経て、東方遠く那須火山に連り、以て關東平原に面し、東南風の衝に當るが故に、太平洋面より齎し來れる水蒸氣は、此群山によりて冷却凝結せらるゝを以て、降雨頗る多く、迅雷亦之に伴ひ、俄然霹靂耳を劈かんとすることあり、然れども山風一過すれば、天地再び開きて、赤日輝き、忽ち晴、忽ち雨、殆ど天候の定りなきは、日光山の特色として、人の能く知る所なり、従て山中水多く、湛へては湖水となりて、明鏡を磨き、溢れては、瀑

布となりて素簾を懸け、殊に山體を構造する岩石も、花崗、石英斑岩の如きあり、安山岩、集塊岩の如きあり、硬軟粗密錯雜するが故に、風雨の浸蝕に對する抵抗力を異にし、犯されたるものは千仞の谷を彫み、残りたるものは萬丈の巔を抽き、四十八湖七十二瀑と共に、日光の風景をして、人の忘るゝ能はざる天然的美觀を現出せしむるに至れり。

日光の沿革

此山は、昔僧勝道の開きしものなれども、其事蹟等に至りては、猥りに事を神話に附會して荒唐妄誕に流れ、又此等の資料たる補陀洛山草創記、瀧尾記の如き、何れも後人の偽作にして、信據すべからざる所多し、依て今其等の傳記舊記を取捨し、稍々信ずるに足るべきものを摘記せん。
勝道と日光 稱徳天皇の天平神護二年、僧勝道此山に入りて、四本龍

寺を建設し、後更に二荒の山頂を究めんとして果さざること二回、然れども桓武帝の延暦元年、終に其素志を貫き、本宮社及中禪寺を二荒山に建設したり、嵯峨天皇の時に至り、勅して満願寺の號を賜ひしかば、爾來満願寺を以て全寺院の稱號となし、四本龍寺の名は、單に本坊一寺のみを呼ぶ名稱となれり。

後年僧空海此地に來り、女體中宮を勸請して瀧尾權現と崇め、又寂光及清瀧權現を創建し、且地名の文字、二荒を日光と改めたりと傳ふ、此時僧徒の眞言宗に傾くもの多し、後更に仁明天皇の時、僧圓仁來り三佛堂、常行堂、法華堂等を建立し、又數多の寺坊を起し、僧侶は多く天台宗に歸するに至れり。

辨覺と日光 高倉帝の時に至り、座主襲職の争起り、日光山は開基以來三百四十九年にして、此に修羅の巷と變じ、堂塔も亦多く兵燹に罹り

しが、後廿四世の座主辨覺の時に至り、社殿佛閣漸く舊に復し、四條天皇は勅して光明院の稱を賜ひ、漸次繁盛に赴き、一時は支坊三十六、各坊附屬の小坊を合すれば、實に三百坊の多きに達せしことあり。

豊臣氏と日光 斯く一山の勢力強盛となりしかば、戦國の頃は、山僧多く、經を捨て、矛を取り、屢々近國の諸侯と戦ひ、其本分を忘失したりしを以て、豊臣氏の天下を得るに及び、其領土を沒收したりしかば、之が爲に一時甚だ衰頹して、堂坊も次第に其數を減するに至れり。

徳川氏と日光 慶長九年、僧天海(慈眼大師)なる者、第五十三代の貫主となり、漸次舊領を恢復し、元和二年には二代將軍秀忠、父の遺言によりて、廟を此地に營み、翌年工成りて、家康の遺骸を久能山より此に移し、東照大權現の號を賜ふ、然るに三代將軍家光の時に至り、宗廟再建の志を懷き、寛永元年工を起し、名工良匠を撰み、天下の財を傾け、寛永十三年に至り

て竣工す、是れ即ち現存の日光廟にして、之が工事に費す日子十三年の長きに亘り、此時又大樂院を建て、此社の別當となせり。

承應三年、守澄法親王五十五世の貫主となり給ふ、之より法親王を頂きて貫主をなすの例を開き、翌年滿願寺を改めて輪王寺と稱せり。

慶安四年、家光の薨するや、遺命によりて、又此に葬り、再び靈廟造營の舉起る、此時又龍光院を建て、之が別當となせり。

明治維新と日光 大政奉還の舉あるや、之に不満なる舊幕府の旗下、第六十七代の貫主たる輪王寺宮(北宮)を奉じて、上野東叡山に據る、之より前江戸脱走の士卒中、日光に集るもの數千人、官軍之を撃退せんとし、て戦を開き、美術の淵藪も危く、兵火の餘燼と化せんとせしが、幕士の奥州に退散せしにより、幸に難を免れたり、然れども領土は沒收せられ、加ふるに神佛分離の令出で、僧侶の神勤を禁じ、神地内にある堂塔は總て

之を寺院地に移し、明に寺社の區別を立つることゝなれり、此に於て日光は二社一寺に分るゝに至れり。

二荒山神社 新宮を二荒山神社と改め、本宮瀧尾中宮祠及連峰の諸社皆之が附屬となる。

東照宮 東照大権現を東照宮と改め、二荒山神社と共に舊社家の司掌となる。

満願寺 山内に散在する數十の佛堂は皆満願寺に合併す。

斯くして三佛堂は満願寺の司掌に屬したれども、東照宮の境内にあるを以て、移轉するにあらざれば撤壊せざるべからざるの運命に陥り、根本中堂將に其根を断たんとせしが、今上陛下御臨幸ありて満願寺を行在所とせられ、三佛堂を移轉して舊觀を失ふ勿れとの恩命を蒙り、後十六年には輪王寺の舊號を復稱することをも許さるゝに至れり。

沿道

日光線の鐵道は、宇都宮より直に日光街に通ずるを以て、沿道の事項として記載する必用なしと雖、徒步探究者の便を計り、少しく此等の事を略記せん。

御成街道と例幣使街道 昔時江戸を發し宇都宮より日光に達する道を御成街道といひ、將軍家參詣の際は此道によりたるものにして、道程凡三十六里あり。

御成道 江戸：王子：川口：岩槻：幸手：栗橋：古河：小山：小金井：石橋：雀宮：宇都宮：徳次郎：大澤：今市：日光

毎年京都より下向の例幣使は、中仙道より碓氷峠を躰え、上野より下野に入り、佐野、栃木、鹿沼等の諸驛を経て日光に達す、之を例幣使街道とい

ふ、若し夫れ此街道に沿ひて舊日光領に入らんか、老杉路を夾んで鬱々
 天に參し、幾里の翠雲長へに透選たるを見ん、是れ即ち有名なる例幣使
 街道の杉並木にして、西洋人の如きは特に此長陰を踏んで杖を曳くを
 樂むといふ。

日光線の鐵道は御成街道の一驛なる宇都宮より鹿沼に通じ、此より例
 幣使街道に沿ひて布設したるものにして、車窓の外或は右となり或は
 左となり、帯の如く屏の如く連れる杉並木は、即ち例幣使街道なり、此杉
 は社廟造營の際、松平正綱の寄進せしものにして、神橋の傍に之が献木
 の碑あり。

宇都宮城址と二荒山神社 二荒山神社は此國の一宮にして、今は國
 幣中社に列す、境内幽靜の趣を缺くと雖、市の中央なる小丘上に位する
 が故に、眼界甚だ廣く、市街の大部を一望に集め得べし、我國古社の一に

して、日光に於ける二荒山神社と此社との關係に就きては、學者の間に
 種々の論議あり。

宇都宮二荒山神社と日光二荒山神社との新舊 人或は同名の社なる
 が故に、日光の二荒山神社を本社と考へ、宇都宮を別社と思ふは非なり、此
 地の二荒山神社は上古より此地に鎮座し、日光は勝道上人の勸請せしも
 のなれば、後の事なり、故に以前は宇都宮の神社のみなりしを、勝道上人が
 日光に神宮寺(中禪寺)を開き、佛語を採りて、補陀洛山と名け、神社を建てし
 より、補陀洛は字音の似たるが故に二荒と稱するに至り、茲に二荒神の對
 立となり、山中の僧徒は種々附會して之を滿願權現又は日光權現等と稱
 し、終に日光を以て二荒神の本社とまで稱するに至りたれども、事實の前
 後を誤るものにして、櫻日本後紀三代實錄、延喜式等の古史に見ゆる二荒
 山神社は、全く宇都宮にある神社のことなり。

二荒山神社祭神論 神社の異同に關し論議あれば、從て祭神の論も亦

超らざる可からず、而して此神は下野國遣の祖先ならんとの事には諸家の説概れ一致し居れども、或は二荒は二現フタアラにして、豊城命と彦狹島王との二神なりといひ、或は二荒は太荒フタアラ、太は尊稱、宇都宮は現宮ウツミヤにして宇都宮二荒神は現し太荒人神即ち御諸別王の事なるべしといふ、蓋し御諸別王は東地未だ文化に露はざる時に於て、皇命を奉じて此地を平げ、子孫永く東國に止まられしことは舊史に見え、其等の威武を思ひ合はすれば、王は即ち現し太荒人神なりと断言して不可なかるべし。

日光の二荒神は勝道上人の勧請せしものにして、本國の神にはあらざるべしとの説あれども非なり、新く御諸別王の東國に於ける功や偉にして、績や大なり、故に後世此附近の山地も、皆王の神靈の所帯と感想し、日光にも亦此王及其父祖の神々を祭れるものなるべし、後世濫りに事を附會して本末を轉ぜんと計る、僧徒の誅亦巧なりといふべし。

宇都宮城址は、二荒山神社の南方にありて互に相對し、近年修めて公園

となす壘濠の設備は幾分を殘存すと雖、大抵廢壊して舊時の崇大を伺ふに足らず、此城は康平年中、宗圓僧正宇都宮座主となりて日光山の別當を兼ねし以來、子孫傳へて其職を奉じ、此を居住となせし由なれども、史上に明徴なし、後延元年間奥羽地方より西上する官軍は、必ず此に會集し、鎌倉を察して後に發し、又戰國時代には阪東平氏の四名城中に數へられしが、慶長二年宇都宮國綱に至り、豊太閤の奪ふ所となり宇都宮家廢絶せり。

宇都宮家の由來 宇都宮氏はもと社務職の家なり、上古に於ては二荒神の神裔其氏子として社務を執られしが、中世藤原氏の權勢盛なるに及び、諸州郡社寺田庄大略、其族黨に占有せられ、宇都宮も亦其運を免れず、關白道兼の孫大僧正宗圓が、近江石山寺の座主なりしを、宇都宮に下して下野守護となし、夫より子孫相嗣で宇都宮の檢校職、日光山の別當を兼帶し、

累代封を襲ぎて檢校座主世業の家祖となれり。
 清巖寺と興禪寺 二荒山神社の東方上河原町に清巖寺あり寺傳によれば弘治元年芳賀次郎高照故ありて自害せしかば其弟芳賀伊賀守清原高繼菩提の爲に建立し芳宮山高照院と號す云々此地はもと御室念佛堂の舊跡にして境内に鐵塔婆ありもと東勝寺にありしを慶長二年彼寺退轉の爲此に移したるものにして高さ一丈餘幅一尺計あり。興禪寺は此北方北河原町にあり宇都宮貞綱の建立にして境内に奥平内藏の墓あり内藏允は同藩士奥平隼人と爭論し自殺しければ其子源八郎及内藏の弟傳藏江戸牛込淨瑠璃阪に於て隼人を討ち取り亡父の醜憤を晴らしたりと又名畫の聞えある啓書記ももと當寺にて得度したる僧にて名を祥啓といひ鎌倉建長寺の書記たりしを以て啓書記と稱せり。

粉川寺址と桂林寺 市の中部なる池上町に粉川寺の址あり天台宗の道場にして永徳二年の草創なりしが近年火災ありて廢絶せりもと紀伊より移すところといふ南朝紀傳には北朝の應安三年五月宇都宮下野守氏綱紀州に發向す紀州の宮方強くして宇都宮敗北す氏綱粉河寺に入り七月五日卒す法名南齡院禪綱と號すと記せりされば此因縁によりて移したるものなるべし此西北日光路に桂林寺あり境内に蒲生君平の墓あり法名を文山義章居士といふ又其表旌碑は南新町に追修碑は廣馬場に建てらる。
 鹿沼城址と今宮神社 鹿沼は日光舊例幣使街道の一驛にして今は日光線鐵道の停車場あり野州麻の市場にして又凝灰岩の産あり停車場のある所を下府所といひ往昔此に下野國府を置きたる地なりと説ける書あれども妄誕たるは勿論にして只府の文字あるにつけて附會

せしのみ。

町の西端に城址あり、壬生の支城にして嘗て壬生綱重の據りし所なりといふ、今宮神社は往時鹿沼城の鎮守神たりしものなれども、創始詳ならず、蓋し日光三社権現を勧請して、今宮といひしものなり、近世の頃は神主三家別當僧二寺ありて地方の名祀なりき。

藤房卿の遺跡と菊澤神社 鹿沼の北方二里に菊澤村あり、國誌云、見野村長光寺の境内菊澤といふ所に萬里小路中納言藤房卿の遺跡あり、去る明和丁亥時ならぬ霖雨にて山崩れしたるに、長七寸許の銅塔一基現はれ、中に觀音の銅佛及び古鏡徑三寸八分の二品あり、其外古錢九百七十六文出たりと、明治維新の初、前記長光寺の菊澤に藤原藤房の祠堂を起して菊澤神社と號し、官府其社格を陞せて郷社となしたるより、今は地方の一名祠となれり、然れども此地を藤房の故地となすは、其考據

全く誤れり、近時所々に此種の濫事あり、憾むべしと地名辭書は論せり、多氣山と荒針の觀音堂 流車鹿沼を發し文袂に至る間、山姿崎嶇として一幅の明畫を見るが如き峯巒を東方に望むべし、是れ即ち多氣山にして半腹に不動閣あり、不動寺護持院と稱す、地方の古刹にして賽者多く、又山中には名勝多し、此南方城山村大字荒針に名高き觀音堂あり、巨谷寺又は大谷山ともいふ、五六丈許なる巖窟の壁に彫り付けたる像ありて、堂を此へ造りかけたる者なり、阪東第十九番の札所にして奇勝頗る多し、山中より石材を切出す之を大谷石といふ、質甚だ軟弱なり。

日光の社廟

日光停車場に下車し、鉢石町を行き盡せば、一溪の山を抱きて奔流するあり、之を大谷川といひ、所謂神橋、此に架す、神橋は朱欄金擬法師を以て

有名なりしが、先年洪水ありて流失し目下再設中に屬す、傳ていふ、勝道上人此山を開かんとして此に來りしが、激流に遮られて渡るべからず、時に神靈二蛇を縦ちて橋とならしめ、蛇背忽ち數株の山菅を生じ、一條山路開きたるが如し、上人之を渡りて入山す、故に此橋を山菅の橋ともいふと、蓋し神話に過ぎざれども、山菅橋の名は枕草紙にも記し、八雲御抄にも下野名所中に黒髮山山菅橋を擧げたるを見れば、此地に山菅橋のあることは、由來古きが如し。

橋を過ぎ石礎を右に上れば、老杉天に參して一路甚だ幽靜なり、丹青の美は茲に其緒を開く。

東照宮 家康の駿府に薨するや、之を駿河の久能山に葬りしが、後遺命に従ひ日光に廟を營み、東照大權現と號す、家光の時に至り大土工を起し、寛永元年より十三ヶ年の歳月を費して成る、結構の壯麗海内に比

なし、塚本氏の論に曰く。

日光廟建築論 我國中古、本地垂迹の説起るに及び、神佛混淆の形勢熟し來り、權現造と稱する一種の宗教的建築は、斯に創められしに似たり、而して日光東照宮は、即ち權現造の最完全せるものにして、好標本と見做すべし、されば神社として本殿、拜殿、神樂殿、神輿舎、神庫、神廳、御手洗、鳥居、透塀、玉垣等を備ふると共に、遺骨を納めたる廟塔、祈禱を修する護摩堂、持佛を奉ずる本地堂、一切經を藏する輪藏、鐘鼓を安ずる鐘樓、鼓樓、及び佛舍利を藏する五重塔等あり、大猷院は東照宮に比せば、更に佛寺式の分子を加へたるも、猶神社風の痕跡を認むべき點少しとせず、又此二宮廟には壯大なる樓門の外に、八脚門、唐門、藥醫門あり、龍宮造と稱する明様の門ありて、他に其例を見ず、蓋し本邦宗教的建築の配置には古來二様の別あり、第一は各種の建築物を中心軸に沿ひて、前後左右均齊に配置するの法なり、是れ通常平坦なる地形に於て用ひらる、第二は其配置第一種の如く、整然たる

ものにあらずして、正面の通路は必しも鳥居若しくは樓門を通じて、重要な建築物に直達せず、紆餘曲折するを常とす、是れ山谷丘岸等の天然の高低に應じて、極めて自由なる配置をなすものなり、日光廟の建築は第二種の配置法に則れり、即ち東照廟にありては、正面に石鳥居あり五層塔其左に峙ち、石階を昇りて二王門あり、簡單なる垣牆左右に列りて全部の外圍をなし、三個の神庫右方より正面に連る、左方には神廡、水盤舎あり、相接して經堂あり、水盤舎の前面に銅の鳥居あり、之を社域の下段となす、前面には石階あり、階上左右に鼓樓、鐘樓あり、鐘樓の後には垣牆を設けて社務所(御供所)に接し、鼓樓の後に本地堂あり、阿闍陀、朝鮮、琉球より貢賦せし所の燈籠、釣鐘等、地形に應じて左右に排置せらる、之を社域の中段となす、中段の正面に重層の樓門あり、陽明門といふ、華麗なる垣牆左右に連り、更に曲折して以て社域の内郭を造る、門内左に神連舎右に神樂殿あり、神樂殿の前方に護摩堂を設く、門内の直路は唐門に導かれ、唐門の左右には透塀

を築き、以て拜殿本殿を圍繞す、内郭の垣牆は内面に於て迴廊となり、其右方中央に通路を穿ち、以て廟塔の正門坂下門に導く、通路は坂下門を入り、數歩にして石段を上り、左折して登ること更に數十級、左方十數階の段上銅鐺の鳥居を入り、右に銅包の寶庫あり、右折して拜殿に達す、石櫓之を繞る、即ち仁王門より本殿に至るには、左折右折、石階を登ること三回とす、更に廟塔に詣する者は本殿前面より起り、右折左折各二回、石階を登ること五回にして寶塔に達す、建築物は斯く紆餘曲折せる通路の前面及び左右に相接近せるを以て、或は東四面し、或は南北面し、或は相重疊し、或は相參差す、本廟に幽深の趣味多きは職として此配置法によるに外ならず、此配置法は斯く多趣多様なると共に、又他の欠點を存す、即ち變化復雜を喜ぶの極、直通の路なく統總の觀なし、高低の地形によりて殿舎を所々に構置す、規模自ら窄狹にして餘裕に乏しく、坦々たる大道の前後に貫通し、各種の建築物、駢然左右に相列するが如き壯觀なし。

東照廟は我國美術の模範と仰がるゝものにして、之が造營に費す所は將軍家の支出のみにても黄金七十萬兩に上れりと、之に諸侯の出資を加ふるときは、其量實に費るべからず、今觀覽の順序に従ひ、主要なる建設物を列記せん。

▲石鳥居 社頭第一に現はるゝは、黒田長政の献納したる石鳥居にして、上に後水尾天皇の宸筆になれる東照大権現の額を掲ぐ、往時鳥居といへば總て木造なりしが、石材を以て築造すること之より盛となれり。

▲五重塔 鳥居内の右側にあり、酒井忠勝の造献なりしが、文化年間焼失し、現在のものは後の再建に關れり、之を見て表門を入る。

▲表門 もと二王門と稱せしが、神佛混淆禁止の際二王の像を撤して狛犬を置き、且之を表門と稱するに至れり、朱塗銅葺にして左右に

堵塀を設く、此の東に通用門、西に裏門あり、又堵塀の石垣中に二個の巨石を疊み込めり、一は阿房丸といひ高さ一丈五尺横二丈二尺に達し、一は滑海藻石といひ大さ亦之に次ぐ。

▲三神庫 表門内の右側にあり、一二の神庫は祭祀の道具を納め、三の神庫には具足を藏す、共に丹塗を施し彫刻を加ふ、一の神庫の破風下を飾れる白象は殊に有名にして、探幽の下繪なりと傳ふ。

▲厩 三神庫の右側にあり、素木造にして松及猿猴の着色彫刻を以て飾る此傍に

▲金松樹 あり、周圍丈餘に及ぶ、嘗て弘法大師が高野山より移植せしものなりと傳へ、當社の神木たり、之より

▲赤番所 の前を過ぐれば

▲御水屋 あり、金碧燦爛として輝けり、鍋島勝茂の寄進にして、水盤

石の長さ八尺五寸、幅四尺、高さ三尺五寸、御影石を以て之を彫り、此に近く

▲輪藏 あり、經堂にして前に傳大士・普成・普建の三像を置く、俗に之を笑堂といふ。

▲唐銅鳥居 水屋の傍あり、家光の献進せしものとす。

▲南蠻鐵燈籠 は此傍にあり、伊達政宗の寄進せしものにして、俗説には此燈籠を鑄造する爲、領内三ヶ年の租税を費せりといふ、其他諸侯より納めし唐銅燈籠、石燈籠等多く附近に並列し、總數百十八基に及ぶ。

以上は第一園の内外に存在するものにして、此等を見終り、石階を上れば、即ち第二園に入る。

▲飛越獅子 石階を上り盡せば、瑞籬を飛び越えたるが如き石彫の

獅子あり、傍に外國より献進せし奇形の燈籠數基あり。

▲蟲喰鐘 朝鮮より献進せしものにして、龍頭の下に一駮あり、是れ其名の起る所以か。

▲廻燈籠 朝鮮よりの献進にして、紋章皆轉倒せり、蓋し外人の製作なれば、自然に誤りしものか。

▲釣燈籠 和蘭國の献進なり。

▲蓮燈籠 琉球よりの献進なり。

以上三基は何れも其形奇にして、本邦從來のものとは異れり、是等は何れも和蘭人が朝鮮琉球より依頼を受け、共に長崎にて鑄造せしものなりともいへり。

▲鐘樓・鼓樓 此兩樓は陽明門外にありて、路を夾みて相對す、右なるは鐘樓、左なるは鼓樓なり。

▲本地堂 鼓樓の西にあり、堂内に三河國峰藥師の模像を安じ、其左右に日天月天等の十二神を祀る、内陣の天井に長さ八間と稱する蟠龍の墨畫あり、狩野永眞安信の筆とす。

▲陽明門 俗に日暮門と稱し、精巧壯麗を極む、今其一斑を記せば、四方唐破風造の樓門にして、柱の數十二本あり、皆槻の白木にて造れる丸柱にして、綾菱の地紋を刻み、内に花卉鳥獸を彫刻せり、入口の左側なる中柱には木杵の二匹虎あり、又内側の一本は逆さ柱と稱し、地紋の形狀轉倒せり、案内者はいふ、此門あまり完全なれば、魔除の爲特に斯くなしたるなりと、此他殆ど所として彫刻ならざるはなく、彫刻にして精巧ならざるはなし、門の正面には後水尾天皇宸筆の額を掲げ、軒先には金鈴を懸けたり、又入口の左右には金剛柵を廻らし、中に極彩色の隨身をおき、之と相背する内側にも亦柵を設けて金色の獅子

を置けり、天井は狩野守信の筆になりし龍にして、墨痕淋漓たり、之を俗に八方院の龍といふ。

▲銅庫 門の東方にあり、神寶を藏する所とす。

▲神樂堂 門を入りて右方にあり、之と相並びて

▲護摩堂 あり、舊時は此處にて護摩供をなしたりといふ、之と相對して立てるは

▲神輿舎 にして、祭禮の時三座の神輿を此所へ出す。

以上は第二圍の内外に存在する建物にして、陽明門より進むこと數歩なれば第三圍の入口なる唐門に達す。

▲唐門 四方唐破風造にして、正面の屋上に唐銅を以て造れる恙蟲を裝置す、其形虎に似たり、又左右の棟には尻切の龍あり、門は唐木にて造り、正面の柱には昇龍降龍に梅竹を添彫し、破風欄間等には人物

花鳥等の彫刻を施し、天井は唐木の一枚板に天人を浮彫りし、兩扉は菊牡丹梅等の高彫りあり、門の左右に連れる瑞籬は草木花鳥の彫刻を以て飾り、拜殿及本社の外を圍めり。

▲一本燈籠 唐門外に唐銅燈籠一基あり、東福門院の寄附にして陽明門内には他に燈籠なきが故に此名あり。

▲間廊下 唐門と拜殿とを連ぬる廊にして、丹塗を施し内には瓮石を敷けり。

▲拜殿 美を盡し善を究めたる壯大の建物にして、高欄濱椽及椽下の大升組まで悉く黒臘色塗りとなし、殿階五級、皆鍍金の板金を以て張り詰めたり、殿内は東西中の三區に分ち、中央の一區は庶人の禮拜所にして、東の一區は聽聞所と稱し、昔時將軍家の着座及三家の着座なり、又西の一區は門主の着座及大臣家の席に充てたり、中間は六

十三疊敷、天井は折揚二重の格天井にして、百間百種の九龍を以て飾り、承塵の上には三十六歌仙の額を掲ぐ、額の繪は土佐將監の筆にして、和歌は後水尾帝の宸翰なり、襖は探幽の筆にして、牡丹と獅子を畫く、又石の間との境には堆朱の卷柱と稱するもの四本あり、一本の費用八萬兩を要せしと傳ふ。

▲東の間の天井は天蓋折揚造りにして、其中央には伽羅木に葵の紋章を刻し、破目は椽椽の一枚板に桐鳳凰等を飾れる寄木細工、西の間の天井には天人を彫み、破目は鷲松梅等を現はしたる唐木の寄木細工にして、何れも精巧目を驚かさざるはなし。

▲石の間 本殿と拜殿との間なる一段低き所にして、廣さ二十疊敷あり、床は花崗岩の一枚石にして、其上に疊を敷き詰めたるより此名あり。

▲本殿 内部は内陣高御座内々陣の三に分たれ、中央は東照宮、右は豊太閤、左は源頼朝を安置すといふ、正面なる金階の左右に鈍銀の花瓶一對あり、重量十八貫ありといふ、之に金銀鍍金の造花を挿み、左右の破目は三國の金にて作りたる秋の七草の蒔繪なりといふ

東照廟祭神論 日光の祭神は、摩訶羅神、東照宮、日吉神にして、神社考詳

節には、摩訶羅神、日吉神、山王は、三者共に異名同神の如く見ゆるを以て、或は同神を分ちて左右に安置せしにあらざるか、兎も角も近年日吉神を秀吉となし、摩訶羅神を頼朝又は信長となし、時勢に従ひ神道者の作爲すること妄も亦甚しといふべし。

東照廟の拜觀は此に盡くと雖も、更に之より奥院に詣でざるべからず、

今唐門外より東に進めば東廻廊に潜門あり、道は之より奥院へ通す

▲潜門 門に黒塗の扉を設け、上の蛙股に睡猫を刻せり、其形大なるにあらざれども、技術真に迫り、數多の彫刻中最も名高きものなり、依

て之を猫門とも稱す、此猫を左甚五郎の作といふは作爲なり。

▲阪下門 奥院の入口にして、柱扉等には花鳥の彫刻あり、之より二百餘級の石階を設く、階は一級毎に一枚の石を用ひ、左右の石欄は皆彫り抜きて造りしものなり。

▲唐銅鳥居 石燈を登り盡したる所にあり、後水尾天皇宸翰の額を掲ぐ、此の右側に

▲銅寶庫 あり、銅包の庫にして、本邦にて銅倉を造ること之を以て初となす。

▲奥院拜殿 唐銅鳥居を潜れば奥院の拜殿あり、其石階下に二頭の石狛あり、松平正綱、秋元泰朝の寄進なり、兩侯は廟社造營の總奉行を命せられ、日夜盡碎の結果として、堂塔殿閣の壯觀なりしものなれば、特に兩侯の寄進を此に置きしものにて、阪下門内にある猷納品は只

此石硯のみなり。

▲鑄拔門 拜殿の後方にあり、高さ一丈一尺餘にして、唐銅を以て鑄
拔きたるものなり。

▲寶塔 鑄拔門の中にあり、家康の墳墓にして、直徑四尺高さ一丈餘
なる黄銅製の鑄物なり。

輪王寺 輪王寺は東照宮の前大路東側にありて、日光門跡又御本坊
と稱せらる。往時は満願寺と稱せしが、仁治年間光明院の稱號を賜ひ、後
法親王を門主に頂くに及び輪王寺と稱せり、然るに明治維新に及び、法
親王は復歸せられ、輪王寺の號も廢止せられ、神佛分離の事起りし時、一
山の寺坊を悉皆此寺に併せ、上古の寺號を復して満願寺と稱す、本寺は
結構頗る壯麗を極めたれども、明治四年火災に罹り、爾後舊觀を復する
を得ず、後十六年に至り、又満願寺の稱を停めて輪王寺と稱し、十八年に

は輪王寺門跡の稱を許可せらる。

▲本堂 路に接して表門あり、之を入れれば左方に壯大なる佛殿あり
即ち輪王寺の金堂にして、もと三佛堂と稱す、本尊は阿彌陀佛にして
左に千手觀音、右に馬頭觀音を安置せり、慶安元年二荒山神社の東に
建てられしが、明治十四年今の地に移轉し、輪王寺の號を復するに及
び三佛堂を改めて輪王寺本堂となせり、境内の庭園は近江八景に擬
したるものなりとか。

▲相輪檜 寛永二十年、僧天海叡山に擬して建てたりと傳ふ、往時東
照宮奥院の銅庫邊にありしが、慶安二年新宮馬場の傍に移し、明治六
年今の地へ移したり。

▲唐銅燈籠 相輪檜の下に兩基の燈籠あり、慶安元年江戸・大阪・長崎
の糸商人等奉納したるものなりと雖、卑賤の町人なればとて廣前に

置くことを許されず、僅に新宮馬場の傍に建つることを許されしが、後相輪堂と共に此に移る。往時如何に商人を蔑視せしかを見るべし。御殿跡 輪王寺と對し、路を隔て、西方にある地にして、もと座禪院のありし所なり。當時座主光明院は鎌倉に在住ありしを以て、座禪院は留守權別當となり、代々勢力を振ひ、事實上座主の職を行へり。後天海の座主となるに及び、光明院は破壊せるを以て、座禪院を假りの宿坊となし、が、元和七年光明院本坊再建せらる。依て後年此地へ將軍家の行館を造營せられたれども、享保年間に取崩さる。故に此地を御殿跡といふ。今此に朝陽館あり。明治十九年舊東照宮の別當たりし大樂院を毀ち移し造りたるものにして、宮内省の御用邸となり、皇族貴賓の宿泊に充てらる。

光明院の址 輪王寺の北東照宮の東南に東照宮假殿あり、臨時遷座

の爲に設けしものなれども、本社拜殿唐門鳥居神庫等皆備れり。此邊は往時光明院のありし所の山、最初日光山の本院は四本龍寺といひしが、廿三代の僧正辨覺の時、別に寺を建て、光明院の稱を賜る。是れ光明院座主の初なり。辨覺より後は、親王又は鎌倉將軍家の一族を以て光明院を繼がれ、多く鎌倉に在住せられしを以て、留守權別當なる座禪院が實權を掌握せしこと前に述べしが如し。

二荒本宮と四本龍寺 二荒本宮は二荒山別宮とも稱し、日光三社の一なり。往時は滿願權現本宮と稱し、二荒山神社の根本鎮座の地なりしが、何時よりか新宮のみ榮えて本宮は却て廢したり。此社は神橋に向ひたる丘上にあり、祠背に三層塔あり。輪王寺に屬す。此他笈掛石、紫雲石等神話の材となるものあり。

三層塔の西に寶形枿葺の堂宇あり、中尊は千手大士、左に五大尊、右に勝

道上人自刻の肖像を安置すといふ、是れ即ち古の四本龍寺に擬したるものにして、往時の四本龍寺も東山谷にありて、今の本宮西側の地を占めしものならん。

二荒山神社 東照宮の表門外より西北に通ずる大路を新宮馬場といひ、長さ二町許、老杉路を夾みて幽静、其究る所に二荒山神社あり、往時此路の左側に相輪櫓ありしが、今は輪王寺境内に移され、又神社の入口に二王門ありしが、今は移して東照宮の表門となれり。

二荒山神社の由來 二荒山神社は僧勝道が日光山開創の際勧請せしものにして、往時は滿願權現又新宮權現と呼び本宮權現、瀧尾權現と共に併せて日光三社大權現と稱し、其本社を男體山に置き、三社權現本社と稱せり、然るに神佛分離の際權現の稱を撤し、本宮權現を二荒山別宮と改め、新宮權現を二荒山神社と改む、又瀧尾權現を瀧尾神社と改めたり、延喜式

に載せ又古史に記せる二荒山神社は宇都宮にある社にして、此祠のことにはあらざれども、稱號同一なれば往々混同して其實を誤る者あり、又祭神は論者により種々の説あり、林羅山は古縁起をひきて本宮の兒神なりとなせども、近世改修の縁起には新宮を大已貴命とし、本宮を高彦根命とし、全く父子の關係を轉倒せり、此は中世以來新宮に奉仕する僧侶の勢力獨り盛となり、遂に本宮を凌駕せるが故に、斯る逆さ事の出來しならん、尙祭神論は宇都宮二荒山神社の條を参照すべし。

▲唐銅鳥居 高さ二丈二尺、有栖川宮殿下の御染筆になれる二荒山神社の扁額を掲ぐ。

▲社務所 もと此に三佛堂ありしが、神佛分離の際輪王寺の境内に移し、其址へ建築したるものなり。

▲拜殿 銅葺赤塗にして四方椽の建物なり。

▲唐門 總黒塗にして、左右に四十八間の瑞籬を廻らす。